

ファンタジア・ドロップアウト

四月朔日霽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パーティから落伍した騎士のユウは逃亡の中で冒険の日々を思い出す。幼馴染のアンリ、頼りがいのある槍騎兵のジョー、ユウを慰めてくれる白魔法使いのエレナ

魔王討伐のため国を経った彼らだが戦いの日々の中なかで少しずつ軋轢が生じていく。

四月朔日濤、初のファンタジー作品。

小説家になろうでも牛頭三九名義で同名を連載しております。

目次

第1回	1
第2回	8
第3回	17
第4回	23
第5回	29
第6回	35
第7回	43
第8回	48
第9回	55
第10回	62
第11回	73
第12回	78

第1回

木の折れる音がした。

振り向くこともなく男は走り続ける。首には汗が流れ、肩で息をしている。胸は粘土でも詰まっているかのようになり、脛には針が刺さったような痛みが走る。鬱蒼とした森には終わりが見えず、男はわけもわからずただ獣道をかき分け進んでいく。

アンリ達に見つかったら終わりだ

カシャカシャ、と金属の擦れる音だけが木霊する。鎧が重い。しかし、魔物がうじゃうじゃと現れるこの森で鎧を脱ぎ捨て逃げるのは自殺行為に等しい。シャツが汗でへばりついて気持ちが悪かった。髪も脂汗の匂いがし、痒みがある。頭を掻くと爪の先に豚の脂身のようなものがへばりついていた。最後に風呂に入ったのはいつだったのだろうか。

たしか、「あの日」の前日に川へ立ち寄った時だろうか。

久しぶりの清流でジョーがはしゃいでいたことを思い出す。ジョーは僕一人が入れそうな重苦しい鎧を河原に脱ぎ捨てまるで北洋の山脈を見上げたような肉体を露わにしていた。エレナは洗濯物をしていて、アンリは川の水を掬い口に受け入れていた。水は日光を浴びてきらきらと光り、まるで透明な宝石でも口に摂取していたようだった。

僕の姿を見つけたのかアンリは「ユウ、こっちなよ。前の泉よりも美味しいのよ」と誘う。鎧を脱ぎシャツとハーフパンツだけになった僕はアンリのもとに駆け寄った。アンリに勧められるがまま水を掬い口に含む。鉄分をあまり感じず、樹木の清涼感が後から鼻に通り返けた。

「ね？美味しいでしょ」

「うん。アンリが気に入ったのなら飲み水として汲むよ。備蓄しているのはどうする」

「いいわ、捨ててちょうだい。あんな鉄くさいの飲めないわ」

僕は馬の背に載ったバッグから水筒を持ってきた。キャップを開

け水筒を反転させる。やや赤みがかつた水がほとほと河原の石を潤していた。川の水で濯ぎ、川の流れに沿って水が吸い込まれていた。

川を見回すとジョーとアンリがはしゃいでいた。水飛沫が飛び、川には波紋が生まれていた。下着姿のアンリも上半身裸のジョーも水浸しになり、声をあげていた。魔王の国に近づくほどに戦況が厳しくなり、パーティにも軋轢が生じ始めていた中で束の間の休息になっていたことを記憶する。

僕は今一人だ。この薄暗い森にはジョーもエレナもアンリもいない。僕一人だけ。簡潔に言えば僕は脱落したのだ。先ほど軋轢が生じ始めていたといったが、その原因のほとんど、いや原因そのものは僕にあった。繁茂する木々が「この落伍者が」と嘲るように風に揺らいでいた。

そういえばアンリ、そして僕が冒険者を志すこととなったきっかけは森の中だった。

僕の故郷は都から遠く離れた小さな農村だった。小高い山に囲まれた盆地で、見渡す限りジャガイモ畑が広がり小さな川のそばには村で一番高い風車小屋が大きな羽根を回している。そんな緩やかに時間流れる村で僕とアンリは育った。

この村の大人たちはかつて東の国を旅していた冒険者だったようだ。僕たちは日曜になると村に唯一ある教会で牧師の説教を聞き、その後大人たちから旅の話、東の国で見たものや起きたことを聞いていた。炎に包まれた谷に遭った話や死の湖を一艘の船で渡った話、東の国には黄金でできた城があったなど今思えば脚色じみた冒険譚であるが子どもたちは目を輝かせながらその冒険話を毎週楽しみに聞いていた。

ある日、感化されて山を冒険してみようとアンリが言うてきた。

アンリは女の子だが、いつも男子に交じって木刀をふるってチャンバラごっこをやっていた。それも男子をいつも泣かして歩いており、遂には村でガキ大将として君臨するほどだった。僕も無理やりアンリにチャンバラの相手をさせられおでこや腕に青あざを負わせられ

泣いて帰ったことがある。夜、僕が母の作ったジャガイモと白菜の入ったシチューとライ麦パンを食べているとき、アンリのお母さんがアンリを連れてすみません、と謝りに来た。アンリの母親が謝りに来るのは日常茶飯事で村の一風景のようなものとなっていた。アンリも謝り慣れているのか「ユウ、ごめんなさい」と紐を引っ張ると喋る人形のように歯の浮いた謝罪を口から吐き出す。僕は首肯し、許した。これは僕が単に寛大な性格だとか、優しいのではなく許さなかったら後が怖いから、ただそれだけなのだ。同じくチャンバラごっこでボコボコにされた男の子がアンリに謝罪も何度もさせたことがあった。女にさんざんにやられたことが許せなかったのだろう、何度アンリが泣いて謝っても「許さない！」と言ったらしい。そしたらどうなったか。

次の日アンリはその男の子を子分たちと一緒にシバいたのだという。子どもながら残酷なことをすると思った。こんな私刑がアンリの母の耳に届かないわけもなく、アンリは自宅のそばに生えているリングの木に縛り付けられていた。それも一晩だけではない、二日にわたって縛られていたのだった。さすがのアンリも大ベそをかいて「ごめんなさいもうしないから」と大声をあげて泣いていた。その声は僕の家からかすかに聞こえた。眠るころには静かになっていたが。

そんなこともあり、僕は明日あぎを増やしたくないためこんな無感情な謝罪で簡単に許してしまった。うちの父が酒を飲みながら「謝る必要はないですよ奥さん。こいつは本ばかり読んでるんだからたまには外で遊んで生傷付けられた方がいいんですよ」と話していた。アンリは帰り際、

「ユウ、またチャンバラの相手してね……今度は手加減するから」

と全く反省の色が見えないことを口にして母親にひっぱたかれていた。

そんなアンリから冒険をしようという言葉が出るのは驚くに値しないことな訳で、いつか言い出すとは予感していた。

「ユウも気になるでしょ！森を抜けた洞窟の中。きつとお宝が隠れるのよ」

村の西にある森の奥は崖になっており、洞窟が掘られている。おそらくそのことを言っているのだろう

「アンリ、危ないよ。お父さんが森には子どもだけで入っちゃいけないって」

「すぐ戻るから大丈夫よ。いつもの時間に戻ってくればバレないでしょ？ちよつと夜になったら一緒にユウのうちに謝りにいってあげるから、さ」

僕は反対したが、アンリに押し切られてアンリと僕と村の子供3人を連れて西の森へ行くことになった。僕は反対したものの多少の冒険への憧れがあった。教会で大人たちが話す東の国への旅、魔女が棲む森を進んでいた時の話を思い出す。樹や蔓が化け物になって冒険者を襲い、冒険者や黒魔法師がそれに立ち向かう勇気溢れる話を。そんな話を聞いてアンリだけでなく、僕も旅に出ているんなものを目にしたい、それをみんなに教えたいと思っていた。

それに西の森なら村からそんなに遠くないし、5人もいるんだ何とかなるだろう。僕はまだ見ぬ冒険に胸を弾ませながら眠りについた。お弁当を持ち、森の入り口へと向かった。母にはアンリとピクニツクをすると伝えたらサンドウィッチを持たせてくれた。眠い顔をしてパンを齧っていた父が僕に笛を手渡してきた。僕はこれはなんだと聞くと「何かあつたら吹きなさい」と言ってきた。まるで僕たちが冒険に行くことを知っているような口ぶりだった。問いただせば母に止められると思ったので黙って笛を受け取った。

森に着くとアンリ達は既に待っているようだった。アンリは木刀を持って仁王立ちしていた、子分たちも木刀を持っていた。

「お待ちせ」

「ユウあんた武器も何も持ってきてないの？」

「だってピクニツクに木刀なんて必要ないし」

僕がそう言うのとアンリは長い溜息をついて「チャンバラごっこをするだけでも言えばよかったじゃない」と呆れていた。たしかにアンリとピクニツクなのだ。その理由で全然通ったではないかなんて思いつかなかったのだろうか。僕はごめん、と謝罪する。

「ま、いいわ行きましょう。お昼までには洞窟に着きたいわね」

土が露出した道を進んでいく。アンリは木刀を振り回しながら鼻歌を謡いながら先頭に立って道先案内を買って出る。その後ろを木刀を持った子分2人が、一番後ろにサンドウィッチの入ったバケツトを持つ僕が歩く。アンリにもう一人の子分は?と聞くと

「知らない。怖気づいたんじゃない?まあ明日ちよつとめてやらないと」

アンリはさらりと怖いことを言い放った。子分たちは自分はちやんと来てよかったと胸をなでおろしていたように感じた。僕もアンリを咎めるでもその子分を庇うわけでもなく沈黙を守った。

真つ直ぐの道が続いていくと、背の低い草が生える草むらに道は変わっていた。地凶もないのでどれだけ進んだのかもよく分からない。ただアンリが進む通りに従っているだけだ。空を飛ぶ鳥は奇声を上げながら蒼穹を闊歩していた。目の前には蛾がひらひらと森を漂っていた。アンリは一閃し、蛾を割いた。蛾は音もなく弱々しく落ちていき、アンリの靴底に埋もれる。しばらく歩いていると、二つの道が現れた。もちろん標識のようなものもない。しかし、アンリは迷う仕草を全く見せず右の道を選んだ。きれいに切りそろえられたブロンズの髪をなびかせながらずんずんと進んでいく。

「アンリ、道が分かるのかい?」

「全然」

「じゃあなんでこの道を選んだの?」

「なんとなくよ」

僕はその言葉を聞いて不安になった。もしかするとこの森に迷いこんでしまうのではないかと不安になった。僕の不安は的中し、数十分も経つと道なき道を手探りで歩いていた。僕たちよりも背の高い木が迫るように囲んでいた。胸を張って行軍していた子分たちも迷ったことに気が付いたのかビクビク怯えながら歩いている。アンリはそんな僕たちをよそ目に出てきた蛇を木刀で突き刺し、尻尾を持って蛇の死体をブンブンと振り回していた。どうすればそんな胆力が付くのだろうか些か疑問である。

子分の一人が「姐さんもうやめましようよ」と言った。アンリは何言ってるのよ、と却下した。それを機に子分2人は泣きながら「やめましよう」「戻りましようよ」とアンリに懇願する。アンリはそれを無視して歩き続けていた。僕も特に口は出さなかった。今更戻っても変えられる保証があるとは到底思えなかったからだ。方向的には洞窟に向かっているので崖についてそれから考えた方がよかろうと思っただのだ。

子分たちが説得すること10分くらいだろうかアンリが急に足を止め僕たちの方へ向き返った。アンリは怖い顔をしていた。子分たちの顔は真つ青になり、僕も心臓が飛び出るような畏怖を覚えた。

「そんなに帰りたいたいなら勝手に帰りなさい。私はこのまま続けるから」

アンリは低い声で言い放った。子分たちは動かないまま立ち尽くしていた。僕はアンリに睨まれ「僕は……残るよ。アンリを1人できないし」と反射的に答えた。本当は走ってでも帰りたいたいが、アンリの眼には殺気を感じたし、なにより彼女を残して帰ることなんてできなかつた。

僕の返答に満足したのかアンリは「そう。大丈夫、何かあったら私がユウを守ってあげるから」と笑ってみせた。木と同化した子分たちは自分で答えを出すこともできず、アンリに

「やる気が無いなら帰れよ。要らないのよあんたみたいなもの」

と冷たくあしらわれた。彼らはトボトボと来た道に戻っていった。

子分が帰ったところで遭難していることには変わりなかった。しかし、それをアンリに注意すれば彼女は一人でも先に進みそうだったのでただ後ろをついていった。お昼なのかお腹が空いてきた。僕はアンリに昼食を提案した。アンリはそうね、と足を止めた。倒木の株に座りサンドウィッチを頬張る。たまごとレタスのサンドウィッチだった。

「魔女の棲む森へ彷徨ったみたい」とアンリが呟いた。魔女の棲む森か……樹や植物が化け物になって襲う森、アンリの目にはこの木々がそう見えるのだろうか。強がっているが、終わりの見えない獣道にア

ンリも恐怖を覚えていたのだ。僕はアンリを元氣付けた

「そうだよ。魔女の棲む森なんだ！ここを越えれば魔女の財宝に行き着くはずさ。一緒に目指そう！」

アンリは顔を上げ、うん！と力強く頷いた。そして僕たちは再び歩み続けた。

第2回

ユウは木の下に座り込み、小休憩をとる。腰に着けた革袋から干し肉を取り出し、噛みちぎった。普段は塩辛いと感じる干し肉も逃げ回っていたからか身体が塩分を求め美味しく感じる。四方を見回しても森の終わりを認めることはできなかった。

この森は1週間程前にアンリ達と越えて、目印として木に紐を括り付けていたのだが、その紐もはじめは視認できたが今ここまででは全く見えない。途中で冒険者にでも会えば道を聞くこともできるのだが、冒険者の群れどころか生気を感じることはなかった。しかし、こんなところで飢え死にするわけにはいかない。僕は重い腰を上げて立ち上がる。そして地面に落ちている木の枝をひよいと持ち垂直にした。木の枝はバランスを保つことが出来ず、簡単に倒れてしまう。僕から見て斜め左に

「コンパスを持っていけばよかったな」

ユウは後悔の言葉を吐露しながら木の枝の指した方向へ足を向けた。

アンリはよく道に迷うと木の枝を倒してそれを頼りに歩いていた。ジョーは「おいおい。そんな勘で行こうとするなよ、一旦地図でも見て確かめようぜ」と真つ当な助言を口にする。僕も馬からコンパスを取り出して方位を確かめる。しかし、アンリは「うるさいわね。私のこれは一度も外したことがないんだから」といい目の前にあつた木を大根を切るようにスパツと斬りおとし無理やり道を作つてずんずんと歩いて行った。よくこんなパーティーでやっていったものだと思うれるだろうが、アンリのいうとおりアンリの道占いは外れたことがないのだ。例えば、後ろに戻るように出てきた時には道をそのまま戻ると正規の道に出たことがあるし、逆に道の無さそうなところをアンリが拓いて歩いていくと実はショートカットしていたなんてこともあつた。道に迷うと毎度アンリとジョーの口喧嘩と、僕が方角を確かめてアンリの当てずっぽうが正しいことを確かめ再び馬の背に載つたバッグに戻るのが当たり前になっていた。

アンリの勘は子供の頃から冴えている。西の森へ冒険したあの日も

アンリと僕だけになり、鬱蒼とした森を歩いていくが歩いても歩いても風景が変わる様子はなかった。鳥の声や虫の羽音なども聞こえず、バキツと木の枝が折れる声だけが響いていた。

静かすぎて少し不気味な雰囲気を出しているが、アンリは出自不明の自信を背負って草木を木刀で薙ぎ払いながら進んでいる。僕は怖くなつたが、声にも出せずアンリの後ろをついていく。

アンリは僕にポツリと「どうしてお母さんは分かってくれないんだろう」と語り始めた。僕は左の足裏の痛みを我慢しながら聞き入っていた。

「いつも怒ってばかりのね。お母さんが泣いたの『どうして女の子らしくしてられないの』って、でも私は女だし遊びだつてユウ達と十分相手ができるから女の子らしくっていうのが分からない」

アンリは相手にできて僕たちは束になつてもアンリの相手にならないと思つたが、容喙せずにつきを聞く。

「だから分からないって言ったの。したらお母さん膝をついて泣いちゃって・・・ユウ、あんたは分かる?」

「お花を摘むとか、上の子について遊ぶとか・・・」

「花なんて摘んで何が楽しいのかしら。花は動かないじゃない・・・虫や蛇は動くからそれを捕る方が面白いのに。それにあいつら私よりも弱いんだもの、ほんとこの村の男は腰抜けばかりね」

アンリは年上の男相手にも泣かせる。僕や子分がいじめられてるといつも助けてくれるのはアンリだ。男としては情けないと頭を悩ますことがあるのだが、アンリにもアンリなりの悩みがあるようだった。

「それは僕もかい?」

「え?ユウはチャンバラにも付き合ってくれるし、あいつらと違って今もこうして冒険をしているもの。ユウのお父さんは『男のくせに』なんて言ってたけど私はユウのことちゃんとした男友達だと思ってるわ」

アンリのことだから「そうよ」とでも答えるかと思えば意外な答えが返ってきた。ただ友達であることを認められたただけだが、まるで王様から勲章を与えられたような優越感があった。

僕はアンリとは逆にチャンバラやかけっこが本当に苦手だった。友達に付き合っては目に見える劣等感を抱えることが多かった。父や母も僕の不甲斐なさには諦観的に捉えていて、他の家では兵士に育てるため騎士道などを教えているようだが両親は農夫として継がせようと思っっているようだった。僕は学校が終わると農作業を手伝わされることが多い。遊ぶことの楽しさも見いだせなかつたので少しずつ友達と遊ぶことも減っていたが僕の友人関係がパラパラと崩れなかつたのはアンリがいたからだろう…

「…アンリにも女の子らしさがあるよ。面倒見はいいし、優しいし」

安易なおべっかを使ってしまい、肝を冷やしたがアンリは肯定も否定もせず緑の魔物に立ち向かっていった。

歩き始めて何時間経つだろうか、足裏の痛みが本格的になつてきた。つま先が地面につくときつま先の付け根に痛みが走る。地面から魔女が僕の生命力を吸い取っているような感覚を覚えた。木の根が飛び出た凸凹した地表を跨いだりして、下を向きながら歩いていると、「ユウー」とアンリが声を上げた。

「ほら！光が見えてきた！私の勘は正しいのよ」

アンリは振り向いて喜ぶ。僕に向けて正当性を主張してきた。まるで自分に言い聞かせるように

アンリは走り出した。待って、と僕も駆け出す。ガス灯の光に集まる羽虫のように僕たちは森の先に見える白い輝きに向かって走った。足の痛みなんて消し飛んだ。頬に葉っぱがこすれてチクチクしたがそんなことも気にならなかつた。いつか聞いた魔女の棲む森を冒険者が攻略する話を思い出す、アンリもきつと同じ気分だろう。あの子分たちが足先を返したことがよりストーリー性を加速させた。

僕たちは遂に森を抜けたんだ！これからが冒険のはじまりなんだ

僕は胸を躍らせ森を颯爽と駆け抜けた。遂に森を抜けるとアンリ

が立ち尽くしていた。

アンリの視線を辿っていくと、そこには大きな林檎の木が生えていた。

僕たちの頭上のはるか上まで枝を伸ばし、幹はごつごつとしていて複雑に枝が分かれていた。リンゴは僕たちが食べるようなものよりもずいぶん大きく一個だけでアップルパイが幾ら作れるだろうか。そんな林檎が大きな木の下に垂れ下がっているものだから風が吹くと枝が折れるのではないかというほど大きく揺れる。

森の先にある洞窟を目指していたアンリもしばらく言葉を発することなくこの林檎の木を見入っていた。僕は林檎の木を見てふと、「エデンの園に迷い込んだようだ」と呟いた。

教会で聞いた知恵の実の話、寓話にでも出てくるような林檎の木を見て人類が追放させられた楽園にアンリと僕はたどり着いたような気がした。

「楽園…… 楽園よね。私達大発見をしたのよね！」

アンリは僕の両手を握りグルグルと回って喜ぶ。僕も「そうだよ楽園だよ」と一緒にはしゃぐ

「これが私達の初めての冒険。そしてこれは私達だけの秘密、いい？」
「うん。誰にも言わないよ」

「家族にもよ」

釘をさすアンリにもちろんだよと返す。アンリは手を放し、麻のズボンの腰に着けていた革袋を外して僕に差し出す。

「冒険者の仲間のしるし。受け取って」

早速革袋のベルトを腰に巻き付ける。仲間のしるしということは僕も交換をしなければいけないだろう。僕は何かあげられるものがあっただろうか。

ユウは思い出したようにポケットから髪留めを取り出した。

「こんなものしか持ってないんだけど、栞に使ってたんだ。お母さんの髪留めだからアンリには似合うか分からないけど」

アンリは「お母さんが買ってくるものより嬉しい…… ありがとう」とブロンズ色の前髪をとめる。普段髪を乱しながら男と交じって遊

ぶアンリとは違い、普通の女の子のような可憐さがあつた。

「アンリ、洞窟はどっちだろう」

「もういいわ」

林檎の大木を後にした僕たちは目的の洞窟へと目指そうと思つたが、アンリはもう十分のようだ。僕もあの幻想的な風景を見た後に洞窟の中でそれ以上のダイナミズムを感じられる自信もなかった。僕はアンリの言う通り村へ戻ることに賛成した。

正規の道を見つけるのはそう難しくはなかった。アンリは迷うことなく進み数分も経たないうちに道に出た。

僕はアンリの隣と一緒に歩く。ずっと従者のように後ろをついていたが、同じ冒険者として肩を並べて道を歩く。アンリも疲れたのか振り回していた木刀を下げて歩いていった。だいぶ日も落ちてきて影がさしてくるようになった。夕暮れぐらいには森を抜けてしまいいい。

道に迷つた時の緊張感は消え、僕たちはただ道なりに戻るところだった、茂みの方からガサガサと音がした。音の出所を見ると大きな黒い影が見えた。

胸騒ぎがした。残念ながらその予感は的中してしまう。熊だ―それも2mくらいはある大きな熊だった。僕と熊の間には間合いと言えるような距離もはやなかった。熊は僕たちに気付き、近づいてくる。

僕はアンリを見る。

アンリはがくがくと震えていた。目の焦点もあつていない。僕も足の震えが止まらない、しかしアンリを守らないといけない使命感に駆られた。僕は“アンリ後ろに下がって”と小声で伝える。ハッとアンリは意識を覚醒させ「だ、大丈夫」と木刀を構えた。

木刀に反応したのか熊は威嚇を始めた。アンリは少しのけぞつた。いけない、刺激を与えてしまったようだ。熊はアンリや僕に敵意を見せていることは明らかだった。黒々とした熊は鋭い爪でアンリの木刀を弾いた。

急いで僕はアンリの手を引っ張り身体でアンリを受け止める。間

一髪のところ熊の攻撃を回避することが出来た。しかし、アンリの右手には真っ赤な血が流れていた。生まれたばかりの子羊のように僕の胸の中で震えている。目には光るものを見ることができた。

男相手でも勝つアンリがこんなに怯えているのは初めて見る。母親に怒られているときでもここまで弱々しくはなかった。

熊のギンギンと光る瞳は僕をとらえていた。50cmほどしか隔たりがない。

僕は腕でアンリを頭を抱きかかえて伏せる。父が熊に襲われたときの処置を覚えてくれたことがある。離れているなら背を向けずに逃げろ、もう近くにいないなら伏せて頭と首を守れと。

アンリにおぶさるようにアンリの体を覆い隠す。もう自分のことなんて頭が回らなかった。既にアンリの手をケガさせたことは自分の失態だと悔やんでいる。これ以上アンリに傷をつけさせないために…

しかし、熊は立ち去る気配がない。あの長い爪であばらや脇腹を引っつかかれ頭を凶器のような歯で噛まれるだろう。そんな時はどうすればいいと父は言っていただろうか…

僕はふと思いついた。この冒険に出かける前に父に手渡されたものを、

「アンリ…アンリ大丈夫かい？」

アンリは声も出せない様子で首だけ動かした。

「ズボンのポケットから笛を出して。そして思い切り吹いて」

アンリは首肯し、ズボンをもぞもぞと探る。僕は熊に注意を払っていた。興奮しているのか唸り声をあげていた。いつ襲い掛かってもおかしくない状況だった。

アンリは笛を取り出し、口に含む。

ピッーーーーー

甲高い笛の音が森に響く。それは少し離れた村にも十分聞き通るくらいの音だった。

木々からは鳥が当惑したように飛び去りバサバサという羽音とキーキーと抗議の声を発していた。熊も笛の音に驚いたのか、ビクツ

と一瞬怯えた様子だった。

『頭を押さえろ！』

男の声から遠くから聞こえ空いた手で頭を守りながら左上でアンリをきつく抱きしめると、次の瞬間銃弾の音が鳴り響いた。

ダンツダンツ

二発銃弾が放たれる。ヒットしたのか熊が苦しみの声を発する。熊は僕たちのもとから離れる。注意は銃にうつったようだ。僕はアンリに声を掛ける。今度は「ありがとう」と返ってきた。

僕は自然に「今日のアンリは女の子らしかったよ」と場違いなことを吐いていた。ハツと僕は口を塞いだ。アンリは形容しようのない顔をしていた。気がつけば村の大人たちが次々とやってきた。その中に父もおり、手には剣を持っていた。熊は立ち上がると大人たちよりも大きな体で腕を大きく動かしクロウを掛けてきた。

大人たちは大勢で矢や銃で対抗する。矢は熊の眉間に突き刺さり悶絶する。

父が剣をおおきく振りかぶって熊の首を一刀両断する。ずっしりした首は鉄球が落ちたような音とともに地面に転がる。

『剣の腕は落ちていないようだな』

『お前もな』

普段の農夫として働く父とは違う、日曜に聞く冒険譚に出てくる冒険者のような父はとてもかっこよくみえた。大人たちのやり取りはまるで小説でも読んでいるようだった。

父が伏せた僕のもとに駆け寄る。

「けがはないか？」

「うん。でも…アンリが」

僕は立ち上がり、アンリを立たせる。アンリの右手には血が流れていた。父はアンリの手を掴んでしばらく見た。すると「大したことはない。すっかり処置すれば傷は残らない」と言った。父は僕を見た。怒られると思ったが僕の頭に手を置いて「よく頑張った」と褒めた。

村に帰ると、アンリの母は泣いていた。そしてどれだけ心配していたかをアンリにコンコンと説教していた。流石にアンリも堪えたの

か「ごめんなさい」と涙を流し抱きついていった。

父は母に今日のことを言わなかったようだ。なんだかバツの悪い気分だ。怒られないのはそれはそれで怖いものだ。夕食の後、父が外の空気でも吸わないかと誘った。

「冒険者に興味があるのか」

父は静かに聞いた。僕はうん、と返すとそうかとまた黙った。

「お父さんは……騎士だったの」

「数十年前の話だけだな」と父は返した。

「あのさ……僕に剣を教えてください。僕冒険者になりたい。今日は迷惑かけたけど、でも新しいことを発見することがこんなに面白いことなんだって気づいたんだ」

父は沈黙を守ったまま家に戻ろうとした。僕は少し残念に思ったが、仕方がないと思った。

「農作業」

「え？」

「うちの手伝いが終わったら一時間だけ教えてやる。まあユウのやる気次第だな」

僕はうん！と強くうなづいた。

その後、僕は父から農作業の後剣を学んだ。アンリも母親をなんとか説得して一緒に手ほどきを受けた。ブロンズの髪にはいつかあげた髪留めをしていた。アンリはグングンと成長し、15歳になる少し前には父を負かすほどになっていた。

15歳になり、僕とアンリは都にある冒険者の養成学校へ通うことになるのだが、それはまたの機会にしておこう……

「光だ」

森を走ること40分程だろうか、目の前には白い光が見えてきた。僕は速度を変えること無く走り抜ける。腰に着けた――アンリに貰った革袋がゆさゆさと揺れ、中に入った食料などがスクランブルする。今の僕は冒険に胸躍らせることもなく、生死をかけたサバイバルな状況に置かれている。魔王の国に近いこの地帯の魔物相手に僕は太刀打ちできない。

僕は逃げ惑うしかできなかつた。

まるで命乞いをするように光に向けて走り抜ける。その先には、大きな林檎の木：

ではなく大きな洋館が場違いに聳えていた。

第3回

気がつくとき空の色は茜色に染め上がり、カラスも寢床へと帰って行くところであった。夕陽が古城のような洋館に当たり、燃え上がっているようだった。ツタのようなものが壁にまで侵食しており、館の前の庭もひどく荒れ、花壇には雑草が不規則に生え散らかしていた。ここまで手入れがされていないということは人は住んでいないのだろうか。

ユウは荒廃した洋館を見ながら夜のことを考えていた。洋館の後ろを見ると一本の小径が繋がっていた。しかし、もうじき暗くなる。これ以上歩くのは危険だろう、幸いにも寢床にもありつけたのだから今晚はこの洋館で過ごすことにしよう。僕は洋館の方に足を踏み入れることにした。塗装が剥げ赤錆が吹いている門は開きっぱなしになっており、入るのは簡単だった。青々とした薔薇の蔓が巻き付かれていたアーチをくぐると平面幾何学型の庭園が広がっていた。門の外から見るとよりも広い庭だ。石膏の彫刻は魔物や悪魔のようなものが施されており悪趣味であったが、バラをふんだんに使った庭園で手入れはなされていないがかつては美しかったことが窺えた。庭の中央には池があり幾重にも重なった木の葉が浮かんでいた。リヴァイアサンだろうか？龍のような怪獣の彫刻を池が囲んでいる。気味が悪い。

数十段の階段を上っていくと洋館である。

「こんな森にあるんだもしかすると魔女の住処かもしれない」

僕はせせら笑いを払いながら階段を上る。走り続けたせいか足をあげるたびに太ももの裏に鈍るような痛みが走る。上るたびに自分の体重と鎧の重みが足にかかり、体重という存在がなければいいのと少し考えていた。ようやく館の扉の前までたどり着き、僕はゆつくりと扉を開けた。中からは生温くて埃臭い空気が入ってきた。僕の肺のなかを侵していくようだ。中には人気どころか灯一つついてはいなかった。玄関の中にはガシャガシャという金属音だけが鳴り響くのみで水を打ったように静かだった。

薄暗い玄関を見回すと中央には大きな階段があり、左右には長い廊下が広がっていた。廊下の先は暗く見えなかったがそれほど広い館なのだろう。まあベッド、いや雨露をしのぐことができるなら贅沢は言わない。冒険の中では宿に泊まることは数少なかった。ほとんどはテント泊だ。四人はさすがに入らないので二つテントを作って二人ペアで寝ることになっていた。アンリと僕、ジョーとエレナでテントを分けていた。魔物の夜襲に備えるためパーティの中でも強いアンリとジョーは別れて寝ることは当然だったが、男女で分けた方がいいのではないかと少し思っていた。しかし、アンリは「私は寝相が悪いから迷惑を掛けられないわ。ユウ、一緒に寝てくれるわよね？」と聞かなかつたので僕はアンリと夜を過ごすことが多かった。アンリの寝相が悪かったことなど一度もないのだが特に不満もなかったので受け入れていた。

ユウが寝室を探そうと左の廊下へ歩き出そうとしたとき、「どなたかいらっしやるのですか？」

どこからか若い女の声があった。僕は暗がりの中を見回すと、奥の部屋から背の低い影が出てきた。よく見ると車椅子に乗っていた。車椅子には喪服のような黒いドレスを着ており、カールがかつた白い髪が特徴的な少女が座っており、人形のような華奢な腕で必死に車椅子を押し僕の前までやってきた。

「お客様ですか。嬉しいですこの館に人が来るなんていつ振りでしょうか。ご拝見するに騎士様とお見受けしますが」

「ええ。旅の途中に仲間とはぐれてしまいました。森に迷い込んだらいい洋館を見つけまして。まさかお嬢さんがいるとは思わず・・・」

「いえ。もう遅いですし、よろしければ旅のお話でもお聞かせくださらないでしょうか。私のような不具者にはそれくらいの楽しみしかありませんの」

と自虐気味に笑った。そして思い出したように自己紹介をした。「申し遅れました。わたくし、ビアンカと申します。以後お見知り置きを」

「僕はユウ。プライオン王国から旅を続けています。ビアンカ、とお

呼びすればいいですか」

「まあプライオン王国から！西の国からのお客様は初めてだわ。お好きなようにお呼びください是非言葉も崩してもらえれば。あまり硬い会話は苦手ですの」

「ありがとうビアンカ。ここは君1人が住んでいるのかい？」

「いいえ、召使いと2人で暮らしてますの。メル！」

「はい。お嬢様」

僕の背後から声がした。僕は不意に振り返るとそこにはメイドがいた。セミロングの黒髪を上で纏め、端正な顔立ちをしていた。切長の目で僕の全体を眺めた後何も言わず会釈をした。

「ユウ…先にお風呂に入ってきてはいかが。その、あなたとても臭うわ」

ビアンカは言いにくそうに手で鼻を押さえながら入浴を促す。メイドは「浴場へ」と口数少なく案内する。僕も風呂に入りたかったところだ。頭は痒いし、鎧の下は汗でベタベタだ。額や顳顬には脂がギリギリと浮かんでいる。

浴場に着くと、「客人用のものですが」とパジャマを差し出してきた。「ごゆっくりどうぞ」と静かに帰っていった。物静かなメイドだ。重く窮屈な鉄製の鎧を脱ぎ、汗で濡れたシャツを脱ぐ。うつすらと割れた腹筋の隣には生傷が絶えない。もう痛みはないが、僕はこの傷を見るのが嫌いだ。色々なことを思い出す。

浴場に入るとまるでプールのような大きな風呂があった。大理石でつくられた浴槽にはワニの石像の口から湯が注入されていた。

「1人で入るのがもったいないくらいだ」

僕は浴槽に入る。長旅の疲れが取れる。

温かい風呂など何ヶ月振りだろうか。やはり沐浴では身体の疲れはとれきれない。風呂場を挟む帳が揺らめいた。

帳の向こうからビアンカを抱いたメイドが現れた。僕は絶句した。まさかお嬢さんが一糸纏わぬ姿で現れてくるとは。ビアンカはゆっくりと浴槽へ沈んでいく。スカートが濡れたことにもメイドは気も止めずそのまま浴場を後にした。

「お湯加減はどうかしら」

ビアンカはバレッタで髪を留めあげ、クラゲのように肢体をお湯の動きに任せていた。

「ああ、とてもいいよ」

「それは良かったわ」

「ビアンカ、その、胸くらいは隠してくれないか。こう開放的だと目の置き所に困るのだが」

ビアンカは脚や腕をひらひらと広げており、豊満な胸とピンクの突起が露わになっていた。女性経験の少ない僕には刺激が強かった。しかし、ビアンカはポカンとして

「どうして？わたくしは構わないのだけれど」

「僕が困るといふか…」

そうなの、とビアンカは首を傾げながら両腕で胸部を隠してくれた。この様子では一緒に入ってきたのも冗談ではないようだ。

「いつもこの時間にメルが髪やからだを洗ってくれるの。もうすぐ戻ってくると思うわ。」

しばらくするとメイドが石鹸と布を持ってきた。バレッタを取り髪を解き、石鹸を泡立てて白い糸に泡を馴染ませていた。ビアンカは目を閉じ気持ちよさそうにしていた。

僕は浴場の壁面に視線を移していた。体が熱くなってきたが、これは風呂の熱量によるものではないことは自分でも分かった。壁面には魔物と人間の戦いが描かれているようだった。宗教画だろうかどうもこの洋館には悪魔や魔物が描かれたものが多い。

「ユウ」

ビアンカが声を掛けたかと思うと「身体を洗ってくださいらない」と突拍子もないことを言い出した。僕は閉口した。メイドもゆっくりと首を縦に振っていた。洗ってくれということだろうか。僕はどぎまぎしながらメイドから布を受け取った。

「脚だけ…洗うよ。他のところはメルさんに任せます」

メイドは条件を受け入れたのか頷いた。僕はガラス細工のようなスベスベした左足を持ちあげた。力を入れずとも簡単に持ち上がった

た。布を脚に当て擦っていく。

「かゆいところがあつたら教えてくれ」

「とても気持ちがいいわユウ」

ビアンカは僕とメイドに手足を持たれてからだを洗われていた。セミロングの白髪が浴槽の外に広がり、メイドに腕や胸を丁寧な磨かれていた。偶に「んっ」という艶めかしい声を発し、僕は興奮を抑え込むのに必死だった。僕は大根を洗っているだけなのだと言いつつ自分でも聞かせていた。メイドが終始無表情だったこともあり余計恥ずかしかった。

「大したものはないですけど、どうぞ召し上がって」

風呂にあがり、僕は広間に案内された。豪邸の食卓と聞くと長テーブルにやけに距離を離して対面で食べるようなイメージを持っていたが、8人掛けのテーブルに対面で食事となった。ビアンカに話すと「そんなのは絵本の世界くらいよ」と笑われた。だが、絵画にシャンデリア、別珍の椅子など僕からすれば十分絵本の世界だ。ビアンカは車椅子を動かし、定位置についた。

「ずっと一人での食事でしたからユウと食事が出来て嬉しいわ」

メイドと二人暮らしだものな。例えば豪華な食事であっても一人で食べるのは味気ないものだろう、僕は少し同情した。

「今日は干し肉しか食べていないからお腹が空いたよ」

「そうでしたの。では、すぐに用意をメル！食事を」

ビアンカが叫ぶとメイドはワゴンで食事を運んできた。赤い絨毯をワゴンが滑走していく。空腹であることは別にラグジュアリーな感じがして興奮する。

前菜のスープとサラダが机に置かれた。なんとということのないコンソメベースのスープであったが、レースのテーブルクロスと荘厳な内装のお陰か食欲をそそった。

「遠慮せずに頂いてください」

ビアンカの言葉に甘え僕は先に食事にありついた。ビアンカはワイングラスに注がれた水に口を付けていた。ドレスからネグリジェに着替え、体型がより強調されている。

「そういえば、ユウはプライオン王国から来たのでしたね。どうしてこのような地まで？」

「僕は王立の冒険者養成学校に通っていて、卒業した後仕事ももらえ
るんだ。僕たちのパーティーはこの先の魔王を討伐するため派遣さ
れたんだ」

ビアンカは「魔王…… そうでしたの。」とスプーンをスプーンで掬い
啜っていた。

「仲間とはぐれたと仰ってましたわね。他の方も王国の方でして？」

「うん。アンリとジョーはプライオン王国の生まれでエレナはフロイ
ダ公国の出身だったな。エレナは魔法師でね。アンリは僕と幼馴染
なんだ」

「そうですね。でもどうして冒険者になろうと思いましたが？ 決して
冒険は楽ではないでしょう？」

僕はメインディッシュの鴨肉に手をつけていたが、ナイフを持つ手
を止める。

「長く…… なるけど」

僕はあまり乗り気ではなかった。これまでの冒険話は僕が聞いた
大人たちのものとは違い情けないものだ。しかし、ビアンカは目を輝
かせて「ええ。もう寝るだけですしゅっくり旅のお話を聞かせてくだ
さいな」と話の催促をしていた。

「分かったよ。僕と幼馴染の女の子アンリが冒険者を志すようになったのは……」

この夜が長い長い旅話のはじまりだった。

第4回

「そこ、顎をしつかり地面につける！一からやり直させるぞ」
教官の活が入る。

何百人という人が石畳の下でからだを倒していた。大きい声、高い声、低い声、枯れた声、悲鳴に近い声様々な声が入り混じる中、教官の声はどの声よりも通っていた。ユウは石畳に両手をつき、手と足のつま先だけで中肉中背の体軀を支え肘を曲げたり戻したりしていた。顛顛からは玉のような汗が吹き出し、目の中に入ると網膜に痛みが走る。汗は頬を伝い石畳に雫となり落ちていく。石畳はユウの力と水分を奪っていくのとは反比例して、水たまりを作っていた。腕立て伏せ300回と言われ広場の前で休むことなく腕を動かし続けているが、肘の感覚がなく上腕筋も悲鳴をあげている状態だった。

僕は15歳になり、冒険者の養成学校に通うことになった。村の子どもたちは兵士に登用されたり、鍛冶職人や農夫など国に奉仕したり家業を継いだりしていったが、僕はアンリと見た誰も経験し得ない冒険に魅せられ父から剣を学びながらも冒険者になる夢をあきらめていなかった。15になる前の秋、僕は両親に冒険者の養成学校に行く許可を出してくれないかとお願ひした。僕は我儘を言う方ではなかった。両親の畑の仕事は手伝っていたし、何かものをねだることもほとんどなかった気がする。そんな僕が一生に一度の願ひとして冒険者になることを告げたのだ。

父は安いワインを飲みながら「そうか」と顎髭に手を当て少しばかり考えたあと、「わかった。農夫になるのはいくつでもなれる。ただ冒険者は今しかないからな」と快諾した。母も父の意見に賛成したようだった。ただし、父から条件が付けられた。もし、卒業後に冒険者としての仕事を受けることがなければ村に帰ってきて家業を継ぐこと、だった。僕はそれを受け入れ、都にある王立の冒険者養成学校へ通うことになった。

アンリも僕と同じく母親に冒険者になることを伝えたようだった。アンリの母は言っても聞かないだろうと根負けしてアンリを養成学

校に行くことを許したようだ。これまでも冒険者になった村の者はいたが、全員男でアンリが冒険者になれば村では女性初の冒険者となる。

はつきり言ってアンリは既に覚醒していた。ガキ大将として村の子どもを束ねていたのもそうであるが、一緒に剣の手ほどきを受けていたアンリと僕の間で、父を圧倒したのはアンリだけだった。僕は習い続けて10年経っても父を負かすことはできなかった。父に「彼女が女として生まれたことは村の唯一の不運だ」と言わせるほどにアンリの剣筋は冴えていた。

15歳になった春、僕とアンリは都に行く馬車に乗り村を出た。アンリの母は泣いていたが、アンリは涙一つ見せず「立派な冒険者として帰ってくるから。お母さん、村のみんないつてきます」と笑顔で元気に旅立った。

馬車に揺られながらアンリはいつかあげた髪留めを撫でながら夢を語った。

「ユウ、わたし達ちやんと冒険者になって村のみんなに土産話をしましょう」

「うん。一緒に頑張ろうアンリ」

「頑張りましたようユウ」

アンリと二人で決意を立てたわけだが、現実はそう甘くはなかった。厳しい訓練に周辺諸国の内政事情や地形の特色など覚えることも多く1年が経つが、正直言って成績は芳しくない。腕立て伏せ300回を終えると力尽きて地面に倒れ込んでしまった。周りの学生もさすがに息を切らし、立ち上がれずにいた。僕はヒエラルキーで言えば中の下くらいポジションであった。今日もついていくのにやっというところだ。

教官から「今日はここまで」という声が掛かった。校舎にある大きな時計台を見ると18時を指していた。

「ユウ、立ち上がれるかい？」

「ああ。ありがとうリリアンヌ」

リリアンヌはポニーテールをなびかせながら僕の手を引き立ち上

がらせる。白地のトレーニングウェアは汗に濡れ、彼女のボディラインが際立っていた。首筋には汗が流れ胸元に吸い込まれていく。三日月型のネックレスが汗に濡れて怪しげに光っていた。

「今日はどうする？ 疲れたのなら無理にとは言わないが」

「いや、お願いするよ。このままではいけないから」

「よし。剣術を少ししてから夕食の後は今日の復習でもしようか」

リリアンヌは白い歯を見せた。

リリアンヌは同じ騎士科の同期だ。序列5位の成績優秀、眉目秀麗その上僕のようなおちこぼれにも慈悲を掛ける優しい少女。騎士科の中でも一、二を争うほど男子に人気のある娘だ。僕はこのところリリアンヌに剣術や勉強を教えてもらっている。

全日課が終わり周りの学生は宿舍や食堂へと向かっていった。食堂へ向かっていく群れの中でも密度が特に高い集団がいた。アンリだ。

アンリは同じ騎士科に入学したが入学後直ぐに頭角を現し、序列1位で去年の校内闘技大会でも上級生を差し押さえ優勝を遂げた。アンリは僕なんかをとくに抜き去り雲の上の存在へとなっていたのだった。アンリは囲いの学生たちに構うことなくスタスタと食堂へと向かっていく。

アンリがこちらを一瞥した。ふとアンリと目が合うがアンリは無表情ともとれる顔でこちらを見て再び前を向いて食堂に入っていた。

気のせいだろうか睨まれた気がする。

「どうしたんだいユウ」

「ううん。よろしくお願いしますよ」

僕は模擬剣を持ちリリアンヌに立ち向かった。リリアンヌも模擬剣を構え、腕を動かし剣を前後させている。剣を交え鎧を削る。力で押し返そうとするが、リリアンヌは涼しい顔をして僕の押しこみをあしらっていた。

剣を離し、胴を狙おうとするリリアンヌはひらりとかわし懐に入り込む。気がつけば僕の喉仏には剣先が突きつけられていた。

「まだまだ甘いねユウは」

「はあ、参りました」

リリアンヌは僕の喉元から模擬剣を離して腰に収めた。

「でも、前よりは剣筋はよくなったよ。ただ力任せにしようとしてるところがまだあるね」

彼女の指摘はいつもの確だった。できているところは褒め、ダメな部分を具体的に教えてくれる。リリアンヌは指導はともわかりやすかった。

「これだけはどうしても抜けないなあ。父が力で押し込めと言っているから癖かもしれない」

「ユウではどうしてもガタイのいい相手には勝てないからね。やはり技術を吸収していくしかないよ」

「うん。」

リリアンヌは僕の後ろにまわり、二人羽織になって技を教えてください。リリアンヌの柔らかい胸が背中に当たる。僕の全神経は肩甲骨に集中しているかのように感触が如実に伝わる。白く細い手で僕の手を握り剣を繊細に振り回す。これはこうして、と懸命に教えてくれるが頭が回らない。

「聞いているかい？ユウ」

「え？う、うん」

「もう今日はやめるかい？」

リリアンヌは呆れたように言う。僕は今度は気をつけるよと彼女に謝り特訓は1時間ほど続いた。

次の日、南海諸国についての授業が終わりお昼となった。学生は売店や食堂へと向かっていった。僕も食堂へと椅子から立ち上がると

「ユウ」

机の前から声をかけられた。目の前を見上げるとアンリが「一緒にお昼食べない？」と誘ってきた。アンリから声をかけられるのは久しぶりのことだった。いや、僕が自然と避けていたのかもしいれない。教室の窓からはポプラの木が見えた。新しい葉に生え変わる時期で青々としていた。僕たちはこの学校で二度目の春を迎えていた。僕

は首を縦に振り、アンリと一緒に食堂へと向かった。

「お友達はどうしたんだい？」

「友達？私に友達なんていないわ」

「でも、いつも周りにいるのは」

僕が訊ねるとアンリは疲れたように

「勝手についてきてるだけよ。一緒にご飯を食べないかって。私馴れ合いは好きじゃないの。」

と吐き捨てた。食堂につくとトレイを持ちパンやおかずなどを受け取り、一番端のテーブルに腰掛けた。アンリはブロンズの髪をかき上げてコーンスープに口を付けた。唇が濡れ艶つぽくなりそれがなんとなく色気を出していた。話題が浮かばず「アンリとこうして昼食を食べるのはいつぶりだったかな」と聞くと「8ヶ月ぶりよ」とすかさず返ってきた。

「随分が仲が良さそうね」

「え？」

「ユウとリリアンヌよ」

「ああ。今年に入ってから剣や勉強などを教えてもらっているんだ」

僕はレタスを齧った。アンリは器用にナイフを使いながら「そう」と相槌を打ちながら肉を切り分けていた。視線は食べ物に向かっていたが、急にナイフを使う手を止めこちらを見て、

「ユウはあの娘のこと好きなの？」

と唐突に質問をしてきた。僕は「は？」と間拔けな声を出した。アンリから発された言葉の意味を呑み込むのに時間が掛かった。ガラスのコップに注がれた水をがぶ飲みする。

「リリアンヌとはそんなじゃないよ。」

僕が弁解するとアンリは「そうなの」と切り分けた肉をフォークで突き刺しひよいと持ちあげ口に運んでいた。

「それじゃあ聞いておきたかったことがあるのよ」

「なんだい。なんでも聞いてくれよ」

「じゃあ遠慮なく」とアンリは前置き、僕を見据える。

「どうして私以外の女こに見てもらってるのかしら」

アンリの口調は怒りも哀しみもこもっていない非常に無機質なものであったが、アンリの瞳は何か言いたげであった。

「なんでって…。」

「彼女よりも私の方が付き合いが長いのだし、それに私の方が強いんだから私に頼めばいいでしょう?。」

僕の答えを遮るようにアンリは立て続けに言葉の応酬をかけてくる。やや横暴な主張だが、実際強いのはアンリだ。リリアンヌよりも序列は上なわけであるし、成績も前回の考査では彼女よりも数十点の差を付けて学年1位であった。僕は120人中62位だったのだが。

僕は「はは」と乾いた笑いを浮かべるほかなかった。何故アンリに教わらずリリアンヌに教わっているかその理由が特にはなかったのだ。

「ユウが彼女のことを好きならまあ分かるのだけれど、彼女も何かと忙しいでしょうしあまり迷惑をかけちゃダメよ。まあ…きでも…のだけれど」

最後の方は聞き取れなかったが、確かにその通りかもしれない。彼女も授業に自分と同じように自習の時間があるのだろうか。

「そうよ今度私がユウを仕込んであげるわ!。」

アンリは目を輝かせて僕に特訓の提案をした。僕は大変じゃないか?と聞いたが「私のウォーミングアップ程度にはなるわ」と何気に毒のあることを口にした。

「久しぶりにユウと食事が出来て嬉しかった」

アンリは食器を片付け、トレイを持ち上げ席を立つ。笑うとセミロングの髪が少し揺れた。

「また一緒にお昼を食べましょ。あ、それと…」

アンリは何かを思い出したように僕の耳元に近寄り、「リリアンヌとはあまり関わらないほうがいいわ」と囁き帰っていった。

帰り際見せた笑顔は村にいた頃の無邪気な彼女と何も変わってはいなかった。

第5回

手首を細かに動かしながら模擬剣を振るう。リリアンヌと剣を交えるごとに腕の先の筋肉が振動しジンとした痛感が走る。しかし、今日は以前とは違い素早く離れ引き技を仕掛けた。驚いたのかりリアンヌは防御が遅れ、手の甲で剣を受けた。それと同時に彼女の模擬剣が弾かれ芝生に転がる。

「いやはや、まさかユウに一本取られるとは..」

「初めてリリアンヌを追い込むことができたよ」

僕はカッターシャツの裾で額の汗をぬぐう。僕の掌にはピリピリした感覚がまだ残っていた。序列5位の相手に勝てたことは僕にとって十分な自信となっていた。リリアンヌは落ちた模擬剣を拾い、腰に収めていた。彼女の手の甲は燃えたように赤くなっていた。

「手は大丈夫かい」

「ああ。この程度造作もないさ、それよりも続きをしようか」

僕は首肯し、剣を構え直す。櫛をすかれたように綺麗に整えられた芝が夜風に吹かれ共鳴するようになびき、火照った体が冷えていくのを感じる。汗が気化して僕の熱量を表すように白い蒸気となり外へ放出される。

ここ数か月の特訓の影響で上達を実感している。子どもの頃から習っていた父の剣は攻撃一辺倒の剣であった。防御は基本的には避け、胴体や脚を徹底的に攻める剣術、10代になると突きについても仕込まれた。僕と同じく父に剣術を教わっていたアンリは今でも攻撃型の剣術で他を圧倒する。ある騎士科の学生がアンリと手合わせした後「剣が全然当たらなくてひたすら迫ってくるのが怖ろしかった」と仲間内に話していた。アンリは子どもの頃から足も速かったのでその敏捷さがあれば相手の攻撃の避けながら攻めることは造作もないことだろう。しかし、僕は半端に身に着けてしまったので受け身も取れず力でも格上の相手には押し返されることが多かった。そんな自分には攻撃型の剣術よりもリリアンヌから習った受け身型・カウンター型の剣術がとてもあっているような気がした。相手に当たっ

た後、引き技を仕掛けたりする方がよほど身につけやすかった。リリアンヌから剣術を見てもらうようになってから実技の成績は良くなった。上位層には太刀打ちできないが、自分より少し格上の学生とは互角に戦えるようになってきた。対戦時間が延びる副産物もあつてか引き分けにもつれ込むことも多かつた。相手からすれば長期化は厄介なものらしい。

僕はその後筋力トレーニングなどをこなして校庭の周りを軽くジョギングして早々に切り上げた。いつもなら図書館で授業の復習をするのだが、今日はリリアンヌが外に用事があり自習となつた。別れ際、リリアンヌは

「明日是非ユウに会わせたい人がいるんだ」

「え？誰だい」

「それは当日までの秘密だよ。だが、その人はギルドや海外事情に詳しいんだ。ユウは東の国に興味があつたようだしね。きっとその人と話が合うさ」

明日の放課後校門で集合しようとしてリリアンヌはいい、胸の位置に掌を見せ街の方へと走っていった。僕は模擬剣を肩に担ぎ腰に着けた革袋から水筒を取り出して口に含む。喉を動かしながら勢いよく水を流し込む。

宿舎に戻るとカッターシャツや下着をベッドに無造作に投げ捨て濡らした布を絞り、布をからだに擦り合わせた。公衆浴場は都にあつたが、毎日通うとお金が足りないので1か月に2回くらいは公衆浴場で残りはこうして濡らした布で体を洗っている。

僕はベッドに横になり目をつむる。疲労のせいかな自然に目が閉じていった。睡魔に落ちる数秒前と言つたところか、扉から環を叩く音がした。

僕は朦朧としながら扉を開ける。前にはブロンドの髪を引っさげ、前髪をきつちりと留めた少女が礼儀正しく立っていた。

「アンリ…こんなところでどうしたんだい」

驚きとともに僕が声を掛けるとパツと花が咲いたような笑顔を見せ

「やつぱりここにいたのね！勉強を教えに来たの。今日はリリアンヌと一緒にではないのでしょうか？」

アンリははずんずんと僕の部屋に入りベッドに投げられた温度を失ったカッターシャツを一瞥する。アンリは壁にかけられた衣文掛けを手に取り「吊るさなきや皺になるでしょ」と母親のような口ぶりでシャツを掛け壁にかけた。僕は窓際に設けられた机に向かい、教科書を机の上に置く。アンリも僕の腰かけた机の背もたれに手をかけ僕の脇に立っていた。

「殊勝ね。教えると言ったら断るかと思つたわ」

僕は教科書を開き、今日習った部分の頁を探した。今日は組織神学の時間であった。

「そんなことはしないよ。アンリに勉強を見てもらえるなら安心だよ」

アンリは満足そうな顔で「まあ断つても椅子にくくりつけてでもさせたのだけれど」と顔色を変えずに言った。僕も断つた後が怖かったので無下にしなかつたのだが、アンリは（僕が言えた立場ではないが）リリアンヌよりも怜愍であるし神学においてはアンリの右に出る者はいないほどに詳しいのだ。アンリの家は村の中でも敬虔なカトリック信者でアンリも小さな教会に日曜の説教以外の行事には必ず参加をしていた。12歳になる頃には聖書の講釈はある程度できるようになっており、神父は「冒険者になるには惜しい人材」だと語っていたのを思い出す。養成学校に入るとより高度な基督教神学を学ぶことになったが、アンリはこの1年ずっと学年首位を取り司教と懇談をしたことがあるくらいだ。

アンリとの復習はリリアンヌの説明的なものとは違い多少荒っぽい教え方で時折「そうじゃないでしょ」「違う」と左耳から聞こえてくるのだが、アンリはかみ砕きながら説明をしてくれるので真剣に教えを聞いたことがない僕でも分かりやすかった。教科書とは別に新約聖書を参照しながら説明をしてくれたのでより理解が深まった。アンリ曰く神学というものは聖書が下敷きになっているのだという。机の端に置いた懐中時計を見ると一時間が経っていた。僕は座りな

がら背伸びをする。アンリは給湯室からシヨコラを入れて部屋に戻り、カップを僕に手渡した。カカオと香辛料の香りが湯気とともに立ち上る。シヨコラを一口飲み一息ついているとアンリが名前を呼ぶ応答すると、

「私とあの娘どっちの方が分かりやすい？」

アンリは両手でカップを持ち微笑を浮かべて尋ねた。言い終えた後「正直にね」と抑揚のない声で付け加えた。僕は「嫉妬かい？」と軽口をたたくと、

「そうよ」

と真顔で返された。突然の答えに僕は困惑し、しどろもどろになった。

「私とユウは『仲間』でしょ？なのにどうして他の子に教えてもらっての？よりもよってあんな…。」

アンリは言い切る前に押し黙った僕は「よりもよってってなんだよ」と聞いたが答えてはくれなかった。アンリは僕に近づきカップを机の上に置いた。

「ユウ、明日の放課後は空いている？久しぶりにぶつかり稽古にでもしましょう」

「いや、明日は…。」

僕はリリアンヌに外へ誘われていることを話した。アンリは話を聞くごとにみるみる顔を険しくしていった。アンリには話さないほうが良かっただろうか。そんなことを考えているとアンリは「前にも言ったのだけれど」と続け

「リリアンヌとは早いうちに関わりを切ったほうがいいわ」

僕が何か言おうとすると「これは嫉妬とかとは別に言っているの」と真剣な顔立ちで語った。僕は教科書を鞆にしまい、アンリに向き合った。

「どうしてリリアンヌをそんなに毛嫌いするんだい」

「別に嫌いなわけではないわ。でも…。」

アンリは床へと視線を落とす。アンリの意見は要領を得ず何か隠し事をされているようで気分はよくなかった。

「何を隠しているんだい」「別に隠してなんかいないわ」

アンリはその後何も言わずベッドから立ち上がり、ゆっくりと扉へといった。帰り際、「明日待っているから」と小さく呟くと伏し目がちにおやすみ、とだけ言い帰っていった。

僕は横になるが、アンリの言葉が離れなかった。

「仲間、か」

言われ腐れた表現であるが、離れつつあったアンリとの友情が引き戻されたような気がした。

校庭を50周走らされ、1時間程度で走り終えた。僕は肩で息をしながら芝生にへたり込んだ。シャツが汗でへばりついて気持ちが悪い。今日は風呂に入りに行ってもいいかもしれない。水筒に入った水をがぶ飲みしていると、アンリが小走りでこちらに近寄ってきた。僕は軽く手をあげた。僕はタオルを受け取り、汗に濡れた髪を拭いた。

「やあユウ。おや、珍しい取り合わせだね」

少し遠くからリリアンヌの声がした。首にタオルを巻き、顛顛の辺りを擦り体に熱気を纏わせやってきた。

「リリアンヌ」「こんばんは、リリアンヌ」

アンリは僕に目配せをする。暗に断れと言いたげな視線でこちらを見るが僕は素知らぬふりをした。

「アンリとはどういう間柄なんだい」

「言ったことがなかったか。僕とアンリは10年来の幼馴染さ」

そうかいとリリアンヌは頷き、今度はアンリに僕と彼女の関係を話していた。アンリはつまらなそうに相槌を打っていた。話を終えるのと、アンリはゆっくりと口を開いた。

「申し訳ないのだけれど、今日ユウは私の練習に付き合ってもらおうことにしたの」

アンリは僕の隣に立ち腕を絡めた。リリアンヌはあまり面白い顔はしなかった。場の雰囲気は凍りつくのを感じたが僕は深刻な顔を浮かべるほかなかった。

「酷いじゃないかユウ。昨日約束をしたのに、君がそんな人間だとは

思わなかったよ」

リリアンヌは抗議の声を上げた。すかさずアンリが反論をするように

「勘違いをしてほしくないのだけれど、私が無理にお願いしたの。それに……」

アンリは一拍おいて、

「あまりよろしくないことにユウを巻き込もうとするのを幼馴染として見逃せなくてね」

アンリは少し微笑んだが目は笑っていなかった。リリアンヌは少しのけぞり視線をあちこちに運んでいた。

「もし、強引に連れていくというのなら私の知っていることを白日の下に晒すけれど……」

「……分かった。ユウを連れていくのはよそう。それでいいんだね」

アンリは意地悪そうな笑みを浮かべて「ええ。その代わり口外はしないわ」と言うどリリアンヌは「ユウ、また明日」と悲しげな視線を向け去っていった。

僕が何が起きたのかよく分からないまま立ち尽くしていると、アンリは腰にかけた模擬剣を取り出す。

「さて、それじゃあやりましょうか」

片手で模擬剣を素振りするとフォンツという空を切る音がした。

「ユウを矯正しなくちゃ……今日は手加減しないから。さあ抜きなきいユウ」

アンリの剣からは殺気を感じた。僕はリリアンヌのことを詳しく聞きたかったのだが、アンリに気圧されたのかおそおそと模擬剣を抜き、構えた。

第6回

手首を細かに動かしながら模擬剣を振るう。

しかし、アンリにはかすりとも当たらず、残像だけが見える相手に蹂躪されていくのはまるでカマイタチにでも襲われているような感覚を覚えた。僕はアンリの剣を受けることに精一杯で、ほぼ棒立ちとなっていた。模擬剣とはいえ本当に殺されるのではないかと言った戦慄が走る。アンリは攻撃を止め後退した。苛烈な剣舞を魅せていたにも拘わらず涼しい顔をしていた。

「どうしたの。あの女と特訓したんでしよう？肩慣らしにもならないわ」

アンリはニタニタと笑いながら模擬剣を軽く素振りした。僕は中腰になり、シャツの裾で額に浮いた汗を拭った。腕がジーンと痺れ、手の感覚がほとんどなく、指と指の間に蛆が湧いたようなむずがゆさがあった。剣を地面に突き立て立ち上がる。

僕は剣を振り上げアンリに迫る。アンリは模擬剣を腕で受け、もう一つの片手に持った模擬剣で僕の腹部を思いっきり突いた。まるで内臓を貫かれたような痛みのもと景色が反転し臀部に硬いものが当たった。一瞬の出来事で自分の身に何が起きているのか分からなかった。目下には星空が映っており、体をギシギシと起き上がらせる。とアンリは20m先にいた。アンリが僕のもとに近づいてくる。

「立ちなさいユウ。まだまだこれからよ」

「そんなに・・・リリアンヌと特訓していたことが気に食わないかい」
僕は嫌味を言った。続けざまに

「それに勝手にリリアンヌとの約束を・・・ちゃんと説明してくれ」
「いいわ。私に勝てたら、ね」

当然僕に勝算はないし、アンリのサンドバッグになっているが、それでもアンリをどんな手を使っても負かしてリリアンヌとの約束を勝手に反故にした訳を吐かせてやりたかった。次はアンリが仕掛けてくる。僕はなんとか剣で受け、身を引きアンリの胴を叩こうと引き技を繰り出す。紙一重のところまで避けられる。

「どこでこんな上品な剣術を覚えたの… ちょこまかと」

アンリはイライラしているようだ。僕は挑発するように

「リリアンヌに一矢報いるほどには上手くなつたよ。アンリの雑把な教え方と違ってね」

アンリはカチンと来たのか脳天を叩き割るように模擬剣を高く振り上げた。僕は頭上で受け、しばらく膠着状態が続いた。僕はのけぞりたかったが、アンリの押す力が強く受けきれないことは明らかだった。

「ユウは楽しそうね。リリアンヌと密着して鼻の下伸ばしてね…」

「しっかり見ているじゃないかアンリ。やっぱりあの時目があったのは偶然じゃなかったんだね」

「いつも見てるわ… 忌々しい。好きでもないのにユウに色目を使うあの女がね！」

アンリの力がまた一層強くなった。顔にも余裕がなくなり顔を紅潮させ、怒りの形相へと変えていた。僕は耐えきれずアンリの剣を押し返し、後退する。再びアンリの脇腹目掛けて模擬剣を振りかざす。

「甘いー」

アンリは叫び僕の視界から消える。僕は視線を下に落とすと、足元に剣を構えたアンリが振りかぶっており、気がつけば模擬剣の芯は僕の臍をとらえていた。僕はボールのように吹っ飛び、校庭に植えられた木にぶつかる。木は僕の無様な姿を嘲笑うかのように幹を揺らしていた。

「お上品な剣術では私には勝てないわ」

アンリは手を貸してくれたが、なんだか癩だったので自力で立ち上がった。

「アンリと僕じゃ実力が違い過ぎるよ」

「そんな次元の話じゃないわ。剣の実用性の話よ。確かにユウ、あなたはだいぶ強くなったわ。でもその剣術が通用するのは学校だけ。外へ出れば役に立たない剣術よ、どうしてか分かる？」

僕は不貞腐れながら静かに首を横に振る。アンリはため息をつき、説明をした。

「リリアンヌの剣術は相手の攻撃を全て剣で防御して引き技や相手の体力を削る戦法であることはユウも十分知っているでしょう。でも、冒険では野犬やクマのような獣や魔物と戦闘をする必要がある。その時あつちから襲ってくるのを待つ？待たないでしょう。私がさつきユウの剣を剣で受けずに腕で受けたのは次の動作が遅くなるから。単数なら防御をする余裕があるかもしれないけど複数の敵がいた場合攻撃を受ける可能性があるでしょ。」

僕はアンリの話に頷きながら聞き入っていた。アンリの説明はリリアンヌから学んだ剣のデメリットについていたからだ。

「でも、ユウと私が師匠…ユウのお父さんから学んだ剣はひたすら相手に切りかかる『現場の剣』攻撃を避けてただ相手に攻めていく。冒険ではこちらの方が数段役に立つの。あの娘が5位で私が1位であるのも剣術の限界というところかしら。まああの娘の剣は冒険者というよりも…」

アンリは何かを続けようとしていたが、「いえ、いいわ。やめておくれ」と話を切り上げた。僕としては後味が悪かった。

「さつきから口幅つたい言い方でリリアンヌが何だというんだ。教えておくれよ」

僕はアンリに詰め寄るが、アンリは「ダメよ。私に勝てなかったんだから」と相手にしてくれなかった。アンリは模擬剣を腰に戻し、「汗かいちゃった。本気で誰かと当たるのは久しぶりだったわ。ユウ、浴場行くでしょう？一緒に行きましょう、奢ってあげるからさ」カッターシャツの襟元をパタパタさせ、暑さで紅潮した顔で言った。

結局アンリはリリアンヌのことを何一つ教えてはくれなかった。

次の日、教室に入るとクラスは異様な喧騒を放っていた。学生の口からは次々と「リリアンヌが…」「まさか」といった言葉が交わされていた。僕は4人ほどで会話していた群れにこの騒ぎの訳を聞いた。リリアンヌが退学処分となったのだ。

噂によると、リリアンヌは窃盗団と関わりがあつたらしい。

窃盗団は都のはずれにあるスラム街を本拠としており、主に底辺冒

険者を中心に組織されていることは聞いたことがある。リリアンヌは養成学校に忍び込みクラスの中でも落ちこぼれ、序列下位や中間層に声を掛け回り窃盗団へスカウト…。実際には恫喝に近い形で窃盗団へ入れさせる仲介役を担っていたようだ。僕は昨日の約束を思い出す。

『明日是非ユウに会わせたい人がいるんだ』

『その人はギルドや海外事情に詳しいんだ。ユウは東の国に興味があったようだしね。きっとその人と話が合うさ』

リリアンヌが僕に会わせようとしていたのはきつと窃盗団の幹部か何かだったのだろう。僕はアンリがいなければ大きく道を外れるところだったのかもしれない。しかし、僕は半信半疑だった。頭脳明晰眉目秀麗で誰にでも優しく振舞うあのリリアンヌが市民に暴力を働いて金品を強奪し、時には人を殺すことも厭わない極悪非道残忍冷酷な窃盗団の一味だったなどと。周りの学生も僕と同じく信じられないといった様子であった。男子同士の会話からは

「リリアンヌ好きだったけどな」「俺も密かに恋してたんだけどな」と片恋慕を吐露していた。

教室の温度が冷めやまないままアンリが入ってきた。茫然としていた僕のもとに駆け寄り肩に手を置き

「……そういうこと」と申し訳なさそうに言っただけの席について。

その後教官が来て一限目の授業が開始されたが、全く内容が入ってこなかった。正直リリアンヌに騙されたことへの怒りやショックはあまりなかった。それよりも形容しがたい感情が僕の胸を苦しめていた。教室の窓をぼんやりと見る。雀が羽を一生懸命羽ばたかせて飛んでいた。僕の胸の苦しきもあの蒼穹へ飛散しないだろうか。

校門を通る石畳のもとで腕立て伏せ300回を終えた。これは何度やっても立ち上がれないほどにきついもので僕は終わると同時に硬い石畳に倒れかけた。

「ユウ」

顔だけあげると僕の前にはタオルを持ったアンリが立っていた。少し息があがっていたが、ほとんど汗をかいておらず僕の首にタオル

をかけてくれた。

「ねえユウ、明日休暇日でしょう。港町へ遊びに行かない？」

「ごめん。そういう気分じゃないんだ。」

明日は月に4回ある休暇日であった。朝から晩まで冒険者を養うため厳しい鍛錬を積んでいる養成学校で唯一各々自由な時間を過ごせる日であるが、僕は正直心の整理が出来ておらずどこかへ行こうという気力もなかった。アンリはしゃがみこみ顔を近づけた。

「部屋にふさぎ込んでても気分は変わらないわ。気分転換に行きましよう。ね？」

アンリは困ったように上目遣いでこちらをうかがった。僕は渋々「分かったよ」と二つ返事をした。食堂でもアンリと一緒に夕食をとったが、ほとんど会話はなかった。食堂内は相変わらずリリアンの話題で持ちきりだった。僕は飯を胃に詰め込んで直ぐに食堂を後にした。

アンリは僕が食堂を出るまで丸椅子に座ったまま目で後を追っていた。

休暇日、僕は麻のパンツにネルシャツを着て校門の前で待っていた。校門にはキャツキヤと騒ぐ女の子の集まりや腕を組んで歩くアベックたちが過ぎ去っていく。朝特有の白い太陽の光に街が照らされ小鳥たちが声を上げて空を闊歩していた。校庭へ目を移すと休みにもかかわらず剣術やトレーニングに励む学生の姿も少なくはなかった。

「お待たせ...ユウ」

振り向くといやにおめかしをしたアンリがいた。珍しく化粧をしており、赤色のワンピースに腰には細いベルトを巻いていた。アンリは頬を赤らめさせこちらをチラチラを見ていた。昨日男子を滅多打ちにしていた血気盛んな少女とは言わなければ分からないだろう。僕は息を呑んだが、何か言わなければと思い「かわいいね」とだけ言った。アンリは顔を余計赤くさせもごもご何か言っていた。落ち着いたのかアンリは咳払いをして

「ありがとう。あまりこういった服は着ないもの」

「よくアンリのお母さんが女の子らしい服を着せようとしていたね」
僕は笑いながら言うのとそれに呼応してアンリも顔を崩して「そう
ね」と笑った。学校からほど近くにある駅に向かい、2等車の切符を
買った。港町までの列車はさほど混んでおらず向き合った二つの席
を確保することが出来た。木製の椅子に凭れアンリと向き合う。間
隔が狭くアンリと膝が交わるくらいだ。汽車は煤を含んだ黒い煙を
吐いてゆつくりと貨車を動かしていく。車窓の景色は横に流れてい
く。

都から田園風景へと景色が変わろうとしていた頃、アンリがゆつ
くりと口を開いた。

「私、知っていたのよ。リリアンヌが盗賊だったこと」

僕は驚くこともなくただ頷いた。恐らくアンリはこのことを知っ
ていたのだろうと察することはできた。

「はじめは噂程度よ。序列上位があることないことはよく言われるこ
とだから。でも、私見てしまったの。リリアンヌが校舎裏で刺青をし
た男と話しているところを。明らかに学校の関係者や冒険者という
感じではなかったわ。それにリリアンヌがしていた三日月型のペン
ダント、ユウも覚えているでしょう」

僕は首肯するとアンリは話を続けた。

「あれは異教徒の証拠よ。窃盗団の一部には底辺の冒険者がいるけれ
ど上層部は東方人からなると聞いたことがあるわ。東方人は教会を
信じていないからリリアンヌも恐らく異教徒なのでしょう」

あくまでアンリのアナロジーの域であるが、説得力がありそれが事
実だと信じてもいいレベルだった。アンリの話を知っていると、いつ
の間にか客がまばらだった客車も人でごった返していた。席に座れ
ず立っている婦人や商人の姿も認められた。

「僕がショックを受けると思ってたんだね」

「ええ... ユウはリリアンヌと仲がよかったから。でも、ユウが悪い
ことに巻き込まれるのは看過できなかつたから...」

僕もアンリも暫く黙っていた。ここしばらくの歯切れの悪さはそ
ういうことだったのだろう。僕はアンリに胸に残る心苦しさを話し

た。どうもアンリのことやリリアンヌへの疑いの心とは別のものであった。こうして車窓を覗いても気が晴れず、メランコリイともまた違った。アンリは少し顔を曇らせ、少し考えたあとに

「リリアンヌのことが好きだったんじゃないかしら」と冷静に答えた。「好き……か。人を好きになったことがないから分からないけど。」
「リリアンヌはモテたから。男子は昨日、リリアンヌの話で持ちきりだったわ」

そういえば、男子の群れは「好きだった」とかそういった話をしていたことを思い出す。僕はあくまでリリアンヌとは友人として一緒に勉強に励んでいたのだが、この感情は彼らと同じような恋だったのだろうか。

僕はおそろおそろアンリに「アンリは好きな人はいるのかい」と聞いた。

「いるよ」

アンリは媚びたような声で顔を紅潮させ、視線を下に落としていた。

自分が一日中悩んでいたものを簡単に暴いたものだから軽く聞いたのだが、まさかの回答だった。僕は急にアンリの恋愛事情に興味が湧いた。村の男たちを子分に従え、今も模擬剣を振り回しているような少女が街の女の子のように人を好きになっているのだ。

「どんな人なんだい」

「とても、強い人」

アンリは羞恥の顔を浮かべて一言だけ呟いた。

強い人か。アンリより強い男というのは余程だろう。頼りがいのある男が好きというのはアンリとて乙女なのだと痛感させられた。話が過熱するごとに列車も加速していく。列車は林の中を走り抜けていった。

「アンリならきつと好きな人と上手くいくはずさ。応援してるよ」

「ありがとうユウ。でも今日はユウの失恋を癒す慰労旅行になりそうですね」

林を抜けると窓から潮の匂いがして景色も海へと一変した。水平

線が定規で引いたように一直線に広がり、海には漁船のような小さな船が浮かんでいた。

僕たちはその後港町で休暇日をゆつくりと過ごした。

第7回

養成学校の話話を話し終える頃には食事が済み、メイドが食器を肅々と片付けていた。窓の外を見ると、深い漆黒に満ち森の木々を薄つすらと視認できるだけであつた。僕は幼い頃にアンリと冒険をした話やリリアンヌとの淡い思い出を語るのについ熱くなり、料理の味もあまり覚えていなかった。ビアンカはまるで僕の思い出に入るように目をつむつて僕の話に聞き入っていた。

「まあここまでが僕の冒険までの話だよ。」

ビアンカはゆっくりと瞼をあげると、シャンデリアのガス灯の光が彼女の瞳孔に入つてキラキラしていた。ビアンカは感嘆の声をあげた。

「これが青春というものね」

メイドがワゴンで紅茶のポットとティーカップを持ってきた。ココ調のティーカップに紅茶がなみなみと注がれていく。ビアンカがミルクはいかが、と尋ね僕は頷いた。褐色の水面に重いミルクが複雑に混ざり合い、クリーム色へと変化していく。

青春……きつと学生時代の僕は純血で様々な可能性を秘めていたのだろう。リリアンヌの口車に乗つて窃盗団の一味になつていたらどうなつていたのだろうか……。なんにでも染まることのできる自由さと脆さは今の自分にはない。厳しい現実や艱難に揉まれ僕は不明瞭な色に混ざり中途半端に染まつてしまつている。自分のこれからの身の振り方も未だつかめていない。

ビアンカは受け皿ともう片手にカップを持ち、

「私には幼馴染というものがいないから少しユウが羨ましいわ。幼馴染と切磋琢磨をしていきながら、そして恋を育んでいく。どんな小説よりも素晴らしい思い出ね」

僕は恋という異物な言葉を聞いて声を出して笑つた。ビアンカは不満げに「何がおかしいのよ」と抗議した。

「ちゃんと聞いていたかい。アンリは好きな人がいるんだよ。僕と恋を育むはずないじゃないか」

ビアンカは「まあ」と驚いた様子で白い髪をいじっていた。

「きつとアンリっていう娘の好きな人はユウよ。こどもの頃あなたが救ってくれて好きになって、リリアンヌっていう盗賊のなれと仲良くしていることに嫉妬だなんて証拠には十分すぎるわ」

「そんなのはアナロジの域を出ないよ。アンリは『とても強い人』って言ったんだよ。その前の日にボコボコにした男が好きだなんて冗談もいいところじゃないかい？」

ビアンカは紅茶に口を付けて「それもそうね……」とうなだれながら小さく呟いた。僕はクリーム色に染まった水面を見つめていた。

アンリは今頃ジョーと上手くいっているだろうか。ジョーは僕やアンリの一つ後輩にあたる。後輩と言っても養成学校は半期入学制なのでほとんど同期に近い。卒業する年の闘技大会、決勝戦はアンリとジョーの戦いだった。ジョーは序列15位とアンリよりも格下だが、序列は学科成績も加味されるため、実践の上ではほぼ互角であった。ジョーは槍騎士で身長よりも長い槍をいとも簡単に振り回して剣士からすればとても厄介な相手であった。闘技場は学生たちの熱気で溢れ返り、円状の闘技場の真ん中には剣を構えた華奢なアンリと槍を持ったアンリよりも二回り大きいジョーが立っていた。

間合いに入れずにいたのか暫く動かないままであったが、アンリが突っ込んでいきジョーは槍を大きく振り回し応戦していた。アンリがジョーの懐に入っていく槍の制空権を奪ったかと思えば、ジョーは槍を軸にして大きく飛び、まるでサーカスのように槍に飛び乗り闘技場の端へと移動した。アンリはさかんにジョーへ攻め込んでいく。槍の突きを上手くよけながら至近攻撃を仕掛けようとするが、ジョーの防御は高くアンリはなかなか攻め込むことはできない。こうした熱戦に闘技場は声援で大きく震え、じりじりとした太陽の日差しが強くなっていた。太陽が昇ってきて観客の学生らは脂ののった顔に汗を流しながら拳を握って試合の様子を見守っていた。

アンリは何を思ったのか持っていた模擬剣をジョーに向けて投擲した。ジョーは体を躲して剣をよけるが、その瞬間アンリはジョーに接近しており素手で組み合っていた。あまりにも無謀である。

ジョーの方が体格で有利であり、隙を作った程度ではジョーを組み伏せるのは困難だ。アンリは案の定ジョーに押し倒され、絶体絶命となる。僕はジョーの勝ちだと思っていたが、アンリはジョーの首に模擬剣を突き付けていた。

どうしてだ？ さつきアンリは剣を投げていたはずではなかったか。僕は先ほどアンリが投げた模擬剣の行方を目で追っていた。見るとそれは剣ではなかった。剣を収める鞘だったのだ！

ジョーはなすすべもなく降参し、アンリは2年連続の校内闘技大会優勝を果たしたのだった。あの試合は今でも養成学校の伝説となっており、アンリとジョーの真剣勝負はこれが最初で最後であったはずだ。僕はこの試合を見てアンリの好きな人はジョーだと確信した。ジョーは王国の冒険者の中ではアンリと共に強く、学生の頃から女生徒にモテていた。冒険ものの主人公のような爽やかさと剛健さを兼ね揃えた男でアンリが女性の部分を出すのも分からなくもない。アンリは僕のようなお荷物を置いて恋に走り続けていくのだろう。アンリとは幼馴染だ今更恨みさえ湧かない。ただアンリとジョーが幸せになってくれることを切に望むばかりだ。

僕はとつくに冷めきっていた紅茶を飲んだ。あんまり美味しくなかった。

ビアンカはメイドに目配せをして、紅茶を注がせた。メイドはおかわりはいかがですか、と尋ねてきたので「お願いします」と口数少なく頷いた。

「ユウ、あなたとアンリのごことは分かったわ。予習も済んだことですし、そろそろ本題を聞いてもよろしいかしら？」

「本題？」

僕が間の抜けた声で言うと、ビアンカは首を少し傾け

「これまでの冒険のお話。どういう国に行って何を見て何を感じたのか・・・これを聞かずに眠ることなんてできないわ」

ユウの顔は強張った。あまり冒険の話はしたくはなかった。

「ああ。そうだったね。旅の話ということだったか。しかし、些か話が長くなってしまうもう暗い。」

「じゃあ、明日もここに泊まればいいのよ！」

ビアンカは良いことを思いついたとでも言いたげに手を合わせた。

「しかしお嬢様…。」

メイドはビアンカを諫めるが、

「大丈夫よ。ユウはパーティーからはぐれてしまったのですし。直に迎えのお連れがやってくるでしょう。それに私もアンリという娘に会ってみたいわ。」

僕は「アンリ」という言葉を聞いて鳥肌が立った。もし、アンリがこの古い洋館に入ってくれば僕はたちまち斬られることだろう。パーティー抜けは大罪であり、正義感の強いアンリは幼馴染であろうと容赦なく斬るだろう。

しかし、パーティーとはぐれたといった以上この提案を突っぱねる弁は思い浮かばないし、なにより洋館を出てその後再び森を抜ける術を持ち合わせていない…。

「ビアンカ、暫くいてもいいのかい？」

「ええ。寂れた屋敷だけれどよかつたらゆつくりしていつて頂戴」

メイドも「お客様がよろしければ」と申し訳なさそうにビアンカの脇に控えていた。僕は諦めたように長い溜息をついて、

「今日はどこまで話そうか」

と自分に言い聞かせるように呟いた。「あの日」まではビアンカに話したくはなかった。できるだけ綺麗な冒険譚を語りたかった。その時子どもの頃に大人たちが教会で話していた東の国の話を思い出した。きつと彼らも語りたくない辛い過去を抱えていたのかもしれない。自分を騙しながら冒険話を脚色して話していたのか、と考えた。

「そうね。まだジョーという者とエレナという魔法師の話を聞いていないわね。その方たちとパーティーを組んで冒険に出るところまでがいいわね」

「お嬢様、お休みが遅くなるとお体に悪いです」

「メル、分かってるわ。」

ビアンカはメイドを制して紅茶を啜った。瞳は旅の話を知りたい

とばかりに輝いていた。

「養成学校を卒業した後……」

ユウはゆつくりと再び言葉を紡ぎ始めた。

一方、森から山を抜けた麓にある国は炎に包まれていた。重厚堅固な石造りの城には窓からあちこちに火柱が立っていた。城を囲むように榮えていたであろう都も火が上がっており、路には逃げ惑う人ごみがゴマ粒のように見ることが出来た。暗闇の中で火の光と黒い雲のような煙が立ち込めていた。

そんな国の様子を5キロほど離れた小高い山から女は見ていた。女は鋭い目つきをし、無表情で灼熱地獄の様子を俯瞰していた。

「もうここに用はないわね…… 後はユウだけ。さあ冒険を続けましょう」

女は燃え上がっている都に背を向け、山を下りていった。ブロンズの前髪に留めている錆びついた髪留めを指で撫で、その指を唇に寄せ、キスをした。

第8回

春の陽気が差し始めていたが、肌寒い風が顔を撫でる。僕は殆ど袖を通したことの無い紺の制服と帽子をかぶり卒業式に臨んでいた。

講堂には碁盤の目のように学生がきれいに並び、張り詰めた空気が漂っていた。教官の言葉一つで静まり返った講堂に革靴の音が鳴り響く。学長が壇に上がり、教官が証書の受け渡しを行い、すぐにアンリの名前が呼ばれた。アンリは序列1位、つまり総代として騎士科の代表として卒業証書を受けとる大役を任されていた。制服のフラワーホールには白い花を挿し、膝下まであるタイトスカートを履いた脚が壇についた階段に進んでいった。怜悧で儼かな面持ちをし、学長に向き合いゆつくりと礼をした。ブロンズの後ろ髪が少し乱れる。前髪はいつものように少し錆びた髪留めがつけられていた。

僕はアンリが卒業式の代表になると聞き、新しい髪留めにしたらどう？と言ったが、

「私はこれが気に入ってるの」

と聞かなかった。新しいのを買ってあげるとも言ったがアンリは頑なにあの髪留めを一日も欠かさずつけていた。

いや、ある日誰かがいたずらでアンリの髪留めを隠したことがあった。

当人はちよつとしたいたずらのつもりだったのだろうか…

アンリは最初慌てふためいていた。

「ユウ！髪留めがないの！ユウがくれた髪留めが！」

「何かと思ったら髪留めか。そんなのまた買えばいいじゃないか」

僕はなんとなしに言う、アンリは激昂し、

「あの髪留めじゃないとダメなの！」

と大きな声を出して僕は目を丸くした。アンリがこんなにも怒ることはそうそうなかったからだ。僕はアンリと共に髪留めを探すことにした。放課後の特訓中に落としたのではないかと校庭の芝生に膝をつけて探したし、アンリの部屋に入ったが見つからなかった。夕方諦めかけていた頃にある学生が他の学生に背中を押されおすおす

とアンリのもとにやってきた。アンリの髪留めを隠していた犯人だった。アンリは焦点の合っていない目をして髪留めを受け取った。前髪を留めるわけでもなくただ手のひらにのった髪留めを見つめていた。怒っているようにも悲しんでいるようにも取れる表情だった。アンリはただ一言

「あなた、だったのね」

と呟くとゆっくり寮へと引き揚げていった。

それからアンリは剣術実践で執拗にその犯人を完膚なきまでに叩きのめしていた。アンリらしくもない騎士道精神が見られないラフな剣だった。

学生は自信を喪失し、一か月も経たないうちに自主退学してしまった。

思い出に耽っていると、アンリは証書を受け取り終え、隊列の前へと戻っていた。「直れ」の声がかかり、学生たちは脚を少し広げた。僕も遅れ気味に直れの姿勢に入った。学長が「学生諸君」と訓示を述べていた。

訓示の中で「これからは冒険者として王国の為、人々の為。」という言葉が耳に入っていた。僕はこれから冒険者になるのだ。子どもの頃であれば手放しで喜んだはずだろうが、今の僕は青春の文字が流砂となり飛散していくそんなセンチメンタルを抱えていた。

講堂の小窓から見える木の幹には固く結ばれたような蕾が開花の時を待ち眠っていた。

僕はその頃冒険者になるか帰郷して家業を継ごうか悩んでいた。リリアンヌに代わり、アンリから剣術や勉強を見てもらっていたがその後の成績もあまり芳しくなく序列42位で終わった。養成学校では卒業後に冒険者の資格を与えられるが、ギルドに入り依頼を貰って生計を立てられる冒険者はほんの一握りだけである。なので殆どの場合学生は卒業後、実家の家業を継ぐまでのモラトリアムな動機で入るか、僕やアンリのように冒険者を志して養成学校に入るも、成績不良で冒険者の道を諦めることが多い。僕の父も冒険者であるが、本業は農夫で農閑期に出稼ぎとしてギルドから仕事を貰い近場へ魔物の

退治に出向くことがあつたくらいだ。冬に村へ帰省した時、父が「学校を出たらどうするんだ」と酒を飲みながら聞いてきたが僕は何も答えられなかった。僕の成績で冒険者として生活をしていける自信はなかったし、とはいえ農夫になることもまだ考えていなかった。

父はタンブラーに口をつけた。

「隣の町にお前と同じ年くらいの娘さんがいるそうだ。その娘を嫁に貰ってうちの畑を継ぐことも頭に入れておいて欲しい」

僕は「少し考えさせてほしい」と言うと、父は「ゆっくり考えてくれ」と言いその後は黙って酒を呑んでいた。

あれから暫く経つが、僕は進退を決められずにいた。いつの間にか式は終わっており、何の感情も生み出せないまま講堂を後にした。門に続く道には学生が続き、涙を流すものや肩を組んで冒険者としての夢を語り合う者、背を丸くしてトボトボと歩くものなど様々だった。雑踏の中で後ろから肩を叩かれた。振り向くと、アンリが笑顔で証書を抱えて立っていた。

「ユウ、私たち冒険者になれたね…」

僕はうん、と首肯した。アンリは留めた前髪を撫で、

「ねえユウ憶えている？子どもの頃、村の西の森へ冒険をした時のこと…あの時ユウが仲間のしるしにこれをくれたのよ。だから私どんなに辛くても冒険者になるために努力してきた。一緒にユウと冒険がしたくて…」

アンリは優しく微笑んだ。僕は胸が苦しくなる感覚を覚えながら苦笑を浮かべた。アンリがずっと昔のことを忘れずに冒険者になりたい一心で序列1位まで上り詰めたのは友人としてとても嬉しかった。一方で去年アンリが序列1位になり遠い存在になっていくような感覚が再び戻ってきた。彼女なら先輩の冒険者を抜いて立派な賞金稼ぎになることは間違いないことだが、僕は冒険者として生きていくほどのスキルもノウハウもない。アンリはだんだんと僕の知らないアンリへと変わっていくことなのだろう。

アンリは怪訝な顔をして、「どうしたの？ユウ」と顔を近づけた。

「はは。僕は村へ帰るかもしれない…父さんが隣の村の娘と結婚し

て家業を継いでくれた。まあ僕は序列も中くらいだし、父さんのように冬に冒険が出来たらなって…」

僕は自分に言い聞かせるように自虐気味に話した。アンリは俯いて深刻な顔をしていたが、前を向き直し

「そんなのダメよ。ユウ」

と諭すように言った。

「だって、ユウも大人たちから聞いた旅の話みたいに色々な国を旅してみたかったのでしょう？だから都まで学校に通ってきたんじゃないの！この二年間を無駄にしているの？」

僕は何も言えずただ下を向いていた。すると、アンリは「じゃあ」と何かを提案してこようとした。

「私とパーティーを組みましょう」

僕はへ？と間拔けな声を出してしまった。

「でも、アンリはセブンスターに行くんだろう。僕と組合「ギルド」が違うのに組めるはずがないじゃないか」

「ああ。その話なら断ったわ。」

僕は啞然とした。セブンスターといえば王国の組合の中でも五本の指に入る名門であり、上級の冒険者しか入る資格のない冒険者なら誰しもが憧れるギルドの一つである。養成学校の序列で言えば10位以内でも入れるかどうかという所で、アンリは類稀なる天稟の剣捌きを買われ在学中からスカウトがかけられていた。

僕は当然セブンスターに入るものだと思っていた。幼馴染が入るとなればたとい僕が冒険者として活躍せずとも十分誇れることだ。しかし、この目の前にいる少女は千載一遇の機会をいとも簡単に逃がしたのだった。

「いいのよ。私のような若輩者があんな組合(ところ)に行っても嫉妬を買うだけだし、初級冒険者はフォーシードに入ることが決まりなのだから。ユウもそうでしょう？」

フォーシードは養成学校を卒業した駆け出しの冒険者が初め入る組合の一つだ。

「うん。登録はフォーシードですけどさ…」

「じゃあ、善は急げね。早速パーティーの登録へ行きましょう！」

アンリが僕の手を取り、引つ張るように連れ出そうとしたが僕は「ちよつと待ってよ」と止めた。

「なによユウ」

「パーティーと言っても二人だけではどうしようもないじゃないか。あと1人か2人はいないと」

「大丈夫よ。もう一人は既に声を掛けているわ」

アンリは組んだままの手を再び引つ張りどこかへと連れていこうとした。アンリの手は絹のように柔らかく温かった。冬の寒さを残した冷たい空気の纏われた肌にはのかな陽が当たったようなぬくもりを覚えながら無邪気に走るアンリに引つ張られ、僕は走った。

石畳の道をあちらこちらへと走り、たどり着いたのは組合であった。入り口の前には先ほどまで卒業式に参列していた制服姿の学生だった者たちが列をなしていた。窓からはコーヒースタンドで冒険者が酒やコーヒーを嗜んでいる姿を視認できた。上階は普通の住まいなのか窓を開けて婦人が洗濯物を干していた。

「ここは組合じゃないか。」

「ここで待っているはずなのだけど……あ、いたわ。ジョー！」

アンリの視線の向こうにはジョーの姿があった。ジョーは僕たちよりも1期後輩だが、闘技大会で準優勝であったことや剣術が認められ早期卒業を果たしたのだった。アンリも早期卒業が出来たのだが、神学をもつと学びたいということで2年満期で今日卒業をした。窮屈そうに頑健な体に制服と帽子を身に着け、軽く手をあげた。ボディラインが制服越しから分かるほど上腕がはち切れそうになっており、太股のあたりも座ったら破けてしまうのではないかと心配するほどびっちょりしていた。ジョーは僕たちの方に近づくと

「アンリ、俺はまだパーティーに入るなんて言っていないからな」

と開口一番アンリに抗議した。

「俺は女がリーダーのパーティーなんざ入る気はないからな」

アンリはジョーの弁を不思議そうな顔で聞いていた。

「どうして？だって私はジョーよりも強いのだから当然でしょ？」

「何を！闘技大会の時はあんな卑怯な手がなかったら俺が勝ってたんだ」

「闘いに卑怯もへったくれもないわよ。勝てばいいのだから…魔物は突然襲ってくるのよ。それくらい対処できなければ話にならないわ」

アンリは涼しい顔で淡々と語った。ジョーは何も言い返せず何故か僕を睨みながら唸っていた。僕は何も言っていない。

ジョーはアンリに指をさし、

「よし！じゃあ、決闘だ！表の広場でお前が勝ったらパーティーでもなんでも入ってやる。でも俺が勝ったらお前が俺のパーティーに入れよ。」

「もし、ジョーが勝ったらユウもそっちに入れるの？」

「ん？その男はいらん。欲しいのはお前だけだ」

ジョーの言葉にアンリは眉間に皺を寄せた。

「そう…じゃあ、負けるわけにはいかないわね」

アンリから余裕の表情は消え、神妙な面持ちでジョーを見据えていた。僕はアンリの間に入った。

「アンリ、別に戦わなくてもジョーのパーティーに入れば…」

「ユウは黙ってて」

殺気だった目で僕を見て低い声で言い放った。こうなったアンリは止められない。

アンリは負けず嫌いなので自分よりも格下のジョー（実力で言えば僕より断然強いが）の傘下に加わるのはプライドが許さなかったのだろう。子どもの頃からアンリは年上であろうが自分よりも弱い相手を自分に従えていたほど実力至上主義者だ。それに彼女は仲間思いだから僕が冒険者を諦めることに最後まで反対してくれている。申し訳なさもあるが、これだけの実力のある新米冒険者に目を掛けられるのは嬉しくないわけがなく、子どもの頃から抱き続けている冒険者になる夢への想いに再び火が付こうとしていた。

「じゃあ、移動しようぜ」とジョーが後ろを向き歩いていく。僕とアンリはジョーの大きな背中についていった。

「大丈夫だよ」

一緒に歩いているアンリが僕に言葉を掛けた。僕は何も反応せず機械的に足を動かしていた。

「ユウは絶対に離さないから・・・」

卒業式から1時間が経ち、昼の陽が真上に上がり組合の建物がある通りには大きな陰が差していた。家と家の間から生ぬるい風が吹き込み、冷涼な空気に満たされていた。

第9回

真新しい刀は直ぐに赤く染まりあがった。

血が刃を伝い柄の方へと滴ってくる。僕は地面へ血を振り払うと目の前には狼の群れが目をギラギラとさせながら低く唸っていた。僕は構え直し、狼の目を離さず睨みつける。

一匹の狼は間に耐えられず飛び掛かり、僕は狼の首から腹部までを開きのように切り裂くと「キャイン」という泣かされた犬のような鳴き声を出して血を流して地べたに伏せた。その後、ひ弱い鳴き声と落下音が聞こえてきた。隣でジョーが槍を振り回し、狼をなぎ倒していた。10数匹いた狼たちは一気に減り、残党は尻尾を向けて逃走する。

「退屈ね」

アンリはつまらない顔をして大剣を肩に担いでいた。

「初心者冒険者が害獣駆除に駆り出されるのは仕方ないけれど全く歯ごたえがない仕事も考え物ね」

「今回ののは少し骨が折れたぞ。数が数だしな」

ジョーは額に汗を流し、アンリに言った。僕も同意するように首を振る。

「狼なんて牙が生えた犬みたいなものでしょ？もっと冒険が出来る仕事ないかしらね。半年も郵便の使いや駆除じゃ嫌になるわ」

「仕事を貰えるだけいいじゃないか。僕たちの同期なんてみんな辞めていつてるんだし」

ギルドに所属し、冒険者として仕事をはじめてもう6ヶ月が経つ。卒業式の後、アンリに誘われパーティーを組むことになったが卒業式当日にアンリはジョーと決闘をすることとなった。組合から広場へと移動をして二人は向かい合った。

「今日は槍を持っていないけれど、それを言い訳に負けを認めないなんてないわよね？」

「馬鹿を言うな。俺は元々剣もやってたんだ。今度こそ勝つてやる」

ジョーは鼻息を荒くしてサーベル刀を抜き、アンリも礼剣を抜いて

片手で剣を持つ。僕は少し離れてその様子を見てみると、なんだなんだとギャラリーが騒がしくなった。街の男は見世物を見るように好奇の目を二人に向けていた。僕の人生を左右するであろう勝負であることなど知らずに。

僕はかつて見た闘技大会のように接戦になることを予想していたのだが、アンリがジョーの間を一気に詰め、金属が交わる音が鳴ると空には金属片が舞っていた。金属片はクルクルと回転して力なく石畳に落ちる。よく見るとそれは刀の先端であった。僕はすぐさまアンリ達の方へ視線を向けると、アンリが崩れて腰を落としたジョーに剣を突き立てていた。ジョーが手に持っていたサーベル刀は先端が折れていた。

「剣を捨ててランサーになったあなたが騎士ほんぎようの私に勝てるわけがないでしょう?」

アンリは冷徹な表情をジョーに向け、「私の勝ちね…」と呟く。ジョーは反論の弁の一つでもあると思っただが、「ああ、俺の負けだ」と潔く負けを認めた。サーベル刀と礼剣では強度に差があり、サーベル刀で戦っていたジョーは不利であったが彼は剣のことには一切触れずゆっくりと立ち上がって肩をはたつた。

「さっきの約束忘れていないわね?」

「ああ、男に二言はない。アンリ、お前のパーティーに入るよ」

ジョーは手をアンリに差し出し、アンリはその手を握った。

僕の周りの野次馬たちはあまりのあっけなさに期待外れだったのか文句をたれながら散り散りになっていく。見世物ではないのに勝手な連中だ。

僕はアンリ達の熱い握手を見ていると、ジョーが僕の所へ駆け寄ってきた。

「さっきは無礼なことを言っちゃったな。すまない、許してくれ」

僕は驚いた。ジョーがこんなに素直に自分の非を認めるとは思っていなかったからだ。

「気にしていないよ。これからよろしく、ジョー」

僕とジョーは強く手を握りあった。

それから僕たちはパーティーを組んで冒険者としてギルドから仕事を貰い、生計を立てていた。アンリやジョーがギルドから期待されていたこともあり、同期に比べれば幹旋される仕事量は多い方だ。しかし、山間部や危険地帯への荷物の輸送や農村での害獣駆除の仕事がほとんどであった。村へ仕送りが出来るほどには稼いではいたが、これでは冒険者というよりも郵便屋やハンターである。想像していた冒険者とのギャップに耐えられず辞めていく同期をこの半年の間で何人も見てきた。先輩冒険者が隣の国への冒険や遠征をしているのを目の当たりにしていることがなんとか冒険者を続ける糧となっている。アンリは野心が強いので現状に一番納得がいていないだろう。

「あと何年こんなことをしていればいいのかしら…。」

アンリが肩を竦める。

アンリの背後からガサガサと音がすると、草陰から残党の狼がアンリに襲い掛かった。僕は「アンリ危ない！」と叫ぶと、アンリは顔色一つ変えずに持っていた剣を後ろに突き立て、背後を見ずに狼を突き刺した。狼は血を噴き出して息絶え、アンリは溜息について突き刺さった死体を地面に叩きつけた。

「さて、終わったから帰りましょう。」

「そうだな。組合に報告に行かねえといけねえからな」

「いや、僕が報告に行くよ。二人は先に帰ってくれていい」

僕がそういうと、ジョーは「そうか？すまないな」と申し訳なきそうに頭を下げる

「ユウ、私もついていくわよ？」

「大丈夫だよアンリ。明日も忙しいんだゆっくり休んで」

アンリは「そ、そう」と少し残念そうに剣を鞘に戻して帰路へとついていた。僕も後ろを歩くようにして都へと戻ることにした。

2時間ほど歩いて都へ辿り着いた。足が棒になってしまうほどに歩き、僕の体力は限界に近い。鎧の下は汗で下着がへばりついて気持ちが悪く、シャツの襟は黄色く変色し、首元から嫌な臭いを放っていた。早く報告を済ませて下宿へ帰りたいたいと思っていた時、辻通りで辺

りを見回している緑の髪の少女がいた。少女は黒い帽子を両手で握って黒い羽織にスカートと黒ずくめの衣装を身に纏っている。見るからに魔法師のようだ。道に迷っているのか、道を通る人に声を掛けようとするが誰も立ち止まること無く通り過ぎていく。少女は今にも泣きそうな顔をしていたので僕は少女に近づき、声を掛けた。

「道に迷っているの？」

少女は言葉を発さず首肯する。僕は続けて「どこに行きたいの？」と聞いた。

「フオ、フォーシードっていう……ギルド……です」

少女はたどたどしい言葉で答え、別の言語で『うう……プライオン王国の言葉は難しいよ』と小さく呟いていた。確かこの言葉はフロイダ公国のものだった記憶がある。フロイダ公国は友好関係を持った国の一つで人的交流も少なくない。そのため養成学校では公用語であるレイマ語の他にフロイダの言葉も教えている。僕はうろ覚えの言葉で

『僕はフォーシードの冒険者なんだ。これから行くつもりだったから一緒に行こう』

と案内を買って出ると、少女は『ありがとう……』と小さな声で言った。

『僕はユウ。仲間と騎士として小さい仕事を重ねているんだ。君は？』

『エレナ……です』

『君はフロイダ公国から来たのかい？』

『はい。出稼ぎに、ギルドでお世話になろうと思って……』

『そうなんだ。実は僕も遠くの村からやってきたんだ。エレナは魔法師に見えたのだけだ』

『私は白魔法を専門にしている……騎士さんの傷を癒したり回復をしたりすることが仕事です』

僕はエレナと石畳の街を歩きながら彼女のことをいろいろと聞き出した。エレナは伏し目がちに僕の質問に丁寧に答えてくれた。僕は彼女が白魔法使いだということを知り『へえ凄いな。魔法師なんて

初めて見たよ』と言うと、エレナは立ち止まり

『ユウさん、なんだかお疲れのようですね……。もし嫌でなければ道案内のお礼に簡単な治癒魔法で疲れを取って差し上げましょうか?』

と控えめに尋ねる。僕は魔法というものを間近にしたことがなかったので、興味があつた。僕は目を輝かせて『嫌じゃないよ!エレナがよければ魔法を見せてくれないか!』と喜んだ。エレナは『そんな大したものじゃないですけど……。』と僕の胸の前に手をかざし、よく分からない呪文のようなものを唱えた。すると僕の胸のところが熱くなり、エレナの手から黒い靄のようなものが吸い込まれていく。エレナはかざしていた手を引いて、『どうですか?』と僕の方を不安げに見つめていた。どうと言われても先ほどと疲労感に違いは特になかった。期待外れだなと心の中で少し思ったのだが、脚の軽さに気づく。歩くごとに太ももと関節が石のように固まる感覚を覚えていたが、完全に取れており、足裏の痛みも消えていた。

「凄い!今まで歩くのが辛かったんだけど、脚の疲れがとれたよ!足が軽い」

僕はエレナの目の前で足を上げて見せる。つい嬉しくてフロイダの言葉を使うことを忘れてしまった。しかし、エレナは初めて笑って『良かった。私の魔法で喜んでくれて』と両手を合わせた。

エレナと話しているとあつという間に組合の建物に着いていた。エレナは『ありがとうございます。』と深くお辞儀をして、受付へと向かっていった。僕も仕事の報告をするために組合に入り、中年の男に仕事が進んだことを伝えると「既にアンリさんが報告に来ましたよ」と返答があつた。男はコーヒースタンドのカウンターに指をさすと、そこには酒を飲むアンリがいた。僕は「アンリ!」と声を掛けると、アンリはこちらに気が付き

「ああ、ユウ。遅かつたわね。受付に聞いたらまだユウが来ていないというから先に報告を済ませたわ。」

「僕が行くって言ったじゃないか」

「これでもゆっくりしているわ。ユウも一杯どう?」

アンリはウエイターにジンを頼み、僕に勧める。僕はアンリの隣に

腰かけ、グラスに注がれたジンを一気に胃に流し込む。喉や胃が焼けるような痺れが僕を襲った。

「さつき、道に迷っていた魔法師を助けていたんだ」

「魔法師？……こちら辺では見かけないわね」

アンリはグラスを持ちながらこちらを見つめる。頬がほんのりと赤く染まっているものの僕を見る目はしつかりとこちらを捉えている。僕は水を頼み、がぶ飲みした。

「うん。フロイダ公国から来たみたい。言葉もまだ拙いみたいでギルドへ行きたいといっていたから案内をしたんだ」

「そう」

アンリはジンを飲み干して、ウェイターに「同じものを」と頼んだ。僕のも頼もうとしていたが、「いや、もういいよ」と制した。

今日の反省などを話していると、僕たちの下に受付嬢がこちらに近づいてくる。

「アンリさん、ユウさんもいらしゃったんですね。よかったです」

「どうしたの」

アンリが聞くと、受付嬢は「アンリさんに紹介したい子がいます」と後ろに誰かを呼ぶ。すると、そこには黒い三角帽を被った黒装束の緑髪の少女が近づいてきた。それは僕が案内をしたエレナだった。エレナも僕に気が付いたのか少し驚いた様子を見せ、その後小さく微笑んで手を脇腹の位置で振ってきた。

「この子はフロイダ公国から来た白魔法師のエレナちゃんです。まだギルドに所属したばかりなのでまだ新しいアンリさんのパーティーに加えてもらえればと思うんですが」

エレナはアンリに向かって小さく頭を下げる。アンリはエレナの目の前に立ち、

『私はリーダーのアンリよ。話はユウから聞いたわ。ユウの疲れを癒してくれたみたいね。ありがとう、よろしくね』

白い歯を見せ、エレナに笑いかけて握手を求めた。エレナは「よろしくお願ひします！」と片言気味の返事をし、両手でアンリの手を握った。

僕たちのパーティーに白魔法師が加わり冒険がまた賑やかになり
そうだ。

第10回

エレナがパーティーに加わり数か月が経つ。エレナもこの言葉にだいぶ慣れ、暫く僕が通訳をしていたが今ではそれも不要となった。

僕たちのパーティーは四人となったことで仕事の幅も広がった。何より大きいのは2・2に分かれて仕事が出来るようになったことだ。アンリとジョーは害獣駆除や最近では簡単な魔物討伐を依頼されることも多くなり、僕とエレナは山岳地帯や危険地帯への輸送を続けて行っている。

今日は高山にある村へ物資を運ぶ仕事であった。商人とともに荷車を押して岩肌の見えた斜面を登るのには苦労した。僕とエレナは荷車の後ろを押すが地表の砂が靴を滑らせ踏ん張りがきかず、岩に引っかかった車輪を押し出すのに時間が掛かった。予定よりも2時間ほど遅れてしまったが、物資を届け終え荷車に乗せてもらい、揺られながら都へ戻っていた。石に躓くと、車は大きく揺れ隣に腰かけていたエレナが僕の肩に寄りかかってきた。

「あ、ごめんなさい」

エレナは顔を赤らめ謝る。

「いや、大丈夫だよ」

僕は頬を掻きながら視線を逸らす。道の脇には低木が並び、囲むように聳える山々にはスギやヒノキが生えていた。冬も近く、奥に見える嶺は白くなっていた。木枯らしが吹きこんできて僕は身を丸くする。

「村の人達、喜んでいましたね。」

「うん。あんな山に住んでいるのでは物も手に入らないだろうからね。生活は大変だろうけど土地に愛着があるんだろうな…。そういうえばエレナはどんな所で育ったんだい？」

「わ、私ですか？私は都の方に住んでいたもので、こういう山とか畑を見るとなんだか新鮮なんですよね」

エレナはこちらを見て控えめに笑う。

「そういうものか。僕とかアンリは見慣れているからなんとも思わな
いけれど」

「ユウさんはアンリさんと幼馴染でしたね」

「うん。これもアンリから貰ったものなんだ。」

僕はエレナに腰に付けた革袋を外して見せ、貰った経緯を話した。

「…とまあそんなことがあって僕たちは冒険者を目指したんだ。
パーティーに誘ってきたのもアンリだしね」

「そうだったんですね。きつとアンリさんはユウさんのこと信頼して
いるんですね」

「どうしてそう思うんだい？」

僕はエレナの顔を見た。

「話を聞いてて、アンリさんはユウさんになら背中を預けられるから
パーティーに誘ったんだなあって」

エレナの言葉を聞いて、ふとアンリが卒業式の日にした言葉を思
い出した。

『一緒にユウと冒険がしたくて…』

あの頃僕は劣等感を抱きながら彼女の声を聞いていてアンリがど
んな気持ちで話していたかなど想像する余裕はなかった。しかし、今
思えばアンリの言葉には？偽りはなかったのかもしれない。アンリ
は僕を立派な仲間として接してくれている。

視線の先には街が見えてきた。聖堂の鐘楼が建造群の中でも飛び
出て目立つ。街に入ると僕たちは報酬を貰い、空の荷車を引く商人の
背に頭を下げた。僕は報告をするため組合へと向かいながら2人の
ことを考えていた。

アンリとジョーはよく喧嘩をしている。この前もアンリが魔物に
突っこんでいき、ジョーがそのサポートに入るようになってしまい、
ジョーが声を上げていた。勿論アンリは無策で突っ込んだことに謝
るはずもなく、それどころか『男のくせに女々しいことを言うわね』と
ジョーを一蹴した。それにジョーも怒り、喧嘩は組合のコーヒースタ

ンドでも続いた。今日は何もなければよいのだが……

組合に着き、受付に仕事を終えたことを伝えて幹旋料を支払った。コーヒースタンドの方に目を向けるが、アンリ達の姿は見られなかった。受付嬢に聞くと、下宿にいるようだ。何故か受付嬢はニコニコしていた。

何かいいことでもあったのだろうか。

僕とエレナは石畳の通りを歩いて近くにある下宿へたどり着く。ドアを開けると、初老の大家が椅子に座り編み物をしていた。僕たちは軽く会釈をして階段を上がる。ギシギシと木の軋む音が響き、陽のあたりが悪い上階は薄暗かった。埃臭くてむせかえりそうになるのを我慢しながらアンリの住む三階まで上がると、ソファアに腰かけたアンリと机に凭れたジョーの姿があった。

「遅かったわね」

アンリが口を開く。僕は息苦しい空気を換えるため、木枠の窓を開け

「山だったからね。登るのに骨が折れたよ」

と釈明した。エレナも「はい。ごめんなさい」と階段のそばに立って謝る。

「ううん、二人ともお疲れ様。椅子に座って頂戴」

僕たちはソファアに向かってある丸椅子に座る。アンリはソファアから立ち、懐から封筒を取り出し僕たちに見せた。

「実は今日、王宮から勅命が来たの！」

アンリはうわずった声で嬉しそうに話す。僕は「ええ!?」と驚いた。アンリが封筒を裏に向けると王家の紋章が施された青色の印璽——まだ封は切られておらず、ジョーも中身が気になりやきもきしているようだった。

「ユウ達が帰ってくるまで封を開けずにいたの…… 私たちの仕事と言える初めての任務ですもの」

「……ジョー済まない。遅れてしまった」

僕はジョーに謝ると「ああ」と口数少なく返事をし、凭れた体を起こして「さあ早く開けようぜ」とアンリの肩に手を置き封筒を覗いた。

「ええ」

アンリは印璽をめくり、封筒から文書を取り出す。紙には文字を囲うように龍と棘が描かれていた。

「明後日、宮殿に参内すること……どうもこれだけみたいね」

アンリは声に出して読み終わると、溜息をついてソファアに凭れかかった。伸ばされた手から僕は文書を受け取る。どうも召集令だったようだ。任務内容は宮殿にて言い渡されるのであろう。僕は肩に入った力を抜き、ゆつくりとアンリの隣に座る。

「明後日は鎧を着て、それといつもの剣じゃなくて礼剣だね。まあ……卒業式で使ったサーベル刀でもいいわ」

「アンリに折られてねえぞ」

「明日買いに行けばいいでしょう」

「今月ギリギリなんだよ！」「知らないわよ。自業自得」「何い」

僕は二人の間に割って入り制する。アンリは呆れたように銀貨をジョーに渡すと、

「ちゃんとした身なりをしてきなさい」

アンリは硬貨の入った麻袋をしまった。「今日はこれでおしまいわよ。みんなお疲れ様」と言うと、ジョーとエレナは部屋を出ていった。

「ねえユウ……」「なんだい？」

僕はアンリと顔を見合わせると優しく微笑んでいた。窓から日差しが漏れてブロンズの髪が明るく光る。

「諦めなくてよかったですよ？」

僕は力強く頷いた。

「アンリが僕を誘ってくれなかったら、きっと冒険者になることを諦めてたよ。でも、今は自分に自信を持てるようになったよ。エレナも加わって責任を持てるようになったのかもしれない。」

アンリはどこか遠くを眺めるような目をし、

「……あ、ええそうよ。ユウは少し頼りない所があったけれど、今はエレナを任せられる仲間よ」

と前髪を直していた。窓の外から冷たい風が入り、肌寒くなり僕は窓を下げ、ソファに座り直す。

「結構早かったね。もう少し掛かると思っていたけれど」

「そうね。私もよ」

僕とアンリは拳を合わせた。

そして、宮殿参内の日となった。僕は部屋にあつた埃のかぶつたサーベル刀を昨日取り出し、おろしたてのシャツと鎧を纏って組合に集まった。アンリは白を基調とした甲冑姿、ジョーは鎧に黒いジャケットを羽織るような格好で、エレナは元々礼服なのか初めてであった時と同じような黒づくめの新品の衣装と三角帽を被っていた。全員神妙な面持ちで終始無言のまま王宮の門へと足を運んでいく。

王宮は巨大な塀に囲まれ、街とは堀で隔てられている。堀の水は透きとおつて藻や小魚が遠目からでも認めることが出来るほどだ。王宮と堀を渡す橋には警吏が橋の向こうにある大きな門の前に立っていた。

アンリは立ちほだかる警吏に召集令状を見せる。警吏は暫く令状を凝視した後、「入れ」と通用門を開ける。ジョーは小声で「あの大きな門じゃないんだな」と囁く。アンリは「馬鹿ね。あれは王族が用いるものよ」と眉間にしわを寄せた。

門をくぐると3キロほどある道が続いており、はるか遠くには白亜の宮殿が輝いていた。この距離でも大きい宮殿である。ホワイトタイルを挟むように芝生が広がり、大きな池のようなものもあつた。広大な宮殿に僕は目を奪われるが、アンリに「あんまりジロジロしちゃダメよ」と注意され、僕は視線を前に向き直す。

歩くこと20分、ようやく宮殿の前に立つ。警吏がついてこい、と案内をする。先頭と最後尾である僕の後ろに挟むように警吏が先導していく。そして、応接間のようなところに通された。

20帖くらいあるような部屋でシャンデリアに金箔や金細工が至る所に散りばめられた内装、ワインレッドの別珍でできたソファと小さなローテーブルが置かれていた。座ることも憚れ、僕たちは立ったまま待っていた。収納棚の上に置かれた時計のぜんまいと針の動く音だけが部屋に響く。

「代表の騎士は直ちに来るように」

警吏が扉を開け、そう言うのとまた閉じて部屋は静寂にかえった。アンリはガシヤガシヤと音を鳴らして、廊下の向こうへと消えた。僕はジョーやエレナと顔を見合わせた。自分達はどうしていく必要はあったのか―そんな半信半疑な顔を各々浮かべまた視線を赤い絨毯へと落とす。絢爛豪華な部屋も数十分も眺めていれば見飽きるもので、なんだか目がちかちかしてきた。時計を見ると、まだ5分しか経っていない。退屈を紛らわせるものもなく僕は壁に凭れ、目を瞑っていた。扉の開く音がして、音の先へと僕たちは目を向けた。アンリが帰ってきた。

アンリは険しい顔をし、ゆっくりと口を開いた。

「まあとんだ厄介な仕事に出くわしたようね…。」

「厄介ってどんな仕事だ？」

ジョーがアンリに詰め寄る。僕とエレナもアンリの元へ近寄った。

「……魔王の討伐よ」

僕は一瞬茫然とした。初めは何かの冗談だろうと思っただが、アンリから言葉は続かなかった。王宮からの任務は魔王の討伐…二人とも絶句していた。

「討伐と言っていたけれど、大方敵情視察の面が大きいんじゃないかしら…。」これは私の推測でしかないけれど」

「どういうことだい？」

僕が聞くと、アンリは「つまりね」と続け

「本当に魔王を討伐させようと思うなら私たちがじゃなくてもっと腕利きのパーティーに依頼するはずでしょう？こんな出来て1年も満たないパーティーに任せるってことは捨て駒がでてもいいような戦争ってことよ…。」それに王子がそろそろ初陣の歳ですし、どれほどのものか見てこいという所じゃないかしら。最初の指揮が負け戦では市民にしめしがつかないでしょうし」

「なるほどなあ」

ジョーは手を顎に添え、頷く。

「しかし、ベテランの冒険者を温存させて魔王の討伐に僕たちのよう

な新米を送り続けて戦力を下げてから攻め込むというのも考えられるけど」

「まあ可能性はなくてもないけれど、もし命の危険があれば失敗しましたと報告すればいいのよ」

アンリは簡単に言うが、王国からの任務を「失敗しました」の一言で済ませられるようにはどうにも思えなかった。僕の不安を他所にアンリは涼しい顔をしていた。

扉から貴族のような男が入ってきた。アンリが「大臣」と敬礼する。僕らもアンリにならない、大臣に向かい敬礼した。

陛下がお前たちに一言申し上げたいそうだ。謁見室に案内する。ただ、その魔法師はここに残れ」

大臣がそう言い去ろうとすると、「ちよつと待てよ」とジョーが声を上げた。

「なんでエレナだけは謁見が叶わないんだ！」

「そのものはフロイダ公国の者だろう。陛下に何があるか分からぬ。」

ジョーが何か言おうとすると、アンリが手で制し

「申し訳ございません閣下。このものは口の利き方がなっておりますので。無礼な振る舞いをお許しく下さい」

と頭を深々と下げた。「まあよい。ついてきなさい」と大臣は気にも留めず部屋を出た。

「どういうつもりだ！」

ジョーはアンリに食って掛かるが、アンリは冷めた目であしらう

「どうもごうも、ここは宮殿であちらのルールが全てよ。エレナごめんなさいね。」

「あ、いえ。私は気にしていませんから…。」

エレナは首を横に振って申し訳なさそうな顔をした。

「待たせてはいけないわ。行きましょう」

僕とアンリとジョーは長い廊下を歩く。王様とお目通りが叶うこととなり、手には汗をかいていた。動悸も速くなっているような気がする。前にいるアンリの足が止まる。大臣が

「私が呼んだら入りなさい」

と申し、他の部屋とは違う重厚な扉の中へと入っていった。扉の半分だけが開かれ、壁の肖像画だけが見える。「入りなさい」と大臣が呼び、アンリに続いて謁見室へと入っていく。赤いカーペットが玉座まで続き、僕たちは大臣のいる数歩手前で立ち止まり、跪く。

「楽にしなさい」

前から低い優しい声が聞こえ、僕はゆつくりと顔をあげた。目の前には立派な顎髭を生やし精悍な顔立ちをした紳士が鎮座していた。

「これからも騎士道に励みなさい」

『はっ』

王様が一言申し上げると、「下がってよい」と大臣に声を掛けられた。僕は緊張で頭が働かないまま部屋を去った。応接間に戻り、エレナを呼んでそのまま宮殿の外に出る。

再び長い門までの道を歩く。その時、アンリの懐に忍んでいた封筒に気が付いた。

「アンリ、その封筒はなんだい？」

アンリは驚いた様子で

「あ、ええ。陛下から預かった親書よ。言い忘れていたけれどこれも任務に入っているのよ」

と答える。

「どなたへのものでしょうか」

エレナが聞くとアンリは「教皇様よ」と封筒を奥へと押し込んだ。

「旅の途中で帝国へ立ち寄るから親書を渡すようにと…副任務と行ったところかしら」

僕は小さく頷いた。そして先ほどから一言も発さないジョーの方を見た。エレナの謁見が認められなかったことからずっと黙ったまままだ。僕は何か話しかけようとしたが、彼から放つ覇気に気圧されその機会を得られていない。アンリは意にも介さずんと進んでいく。

「ジョーさん…」

エレナが沈黙を破り、無然としたジョーに声を掛ける。

「さつきは私のために、ありがとうございました。少し、嬉しかったで

す…。」

「あ、ああ。エレナは大切な仲間だからな。許せなかっただけだ」

ジョーはぶつきらぼうに言い、顔を紅潮させ空を仰いだ。

「そうね。私も納得はいかなかったけれど」

とアンリがフフツと笑った。

「なんだよ。さつきはあっちのルールが全てだとか言ってたのによお」

「しよがないでしょ！あの場は大臣がいたのだから」

アンリとジョーは顔を見合わせ、ふつと笑いあつた。喧嘩していてもいつの間にか仲直りしているのがアンリとジョーだ。僕はエレナに同意を求めるように笑いかけた。エレナも二人を見て微笑んだ。

参内から一週間ほどが経ち、遂にプライオン王国を旅立つ日がやってきた。駅には村からやってきたアンリの母がアンリにくどくどと話をしていた。懐かしい光景だ。

「アンリ、あまり無茶はしないでね。こまめに連絡してね」

「ええ。分かっているわ」

「そう言つて！あなたは学校の頃には一通も手紙をよこさなかったじゃないの！首席のことだつて今聞かされたのだし！村にも一度も帰つてこないで…。」

「分かったから落ち着いてお母さん」

さすがのアンリも怒つた母相手にはタジタジの様子だ。ジョーやエレナは目を丸くして遠くから様子を見ていた。ようやく説教が終わったのかアンリとアンリの母が抱擁を交わした。アンリの目には涙が視認できた。アンリの落涙は旅の別れを鮮明にさせた。

国境の街まで行く列車が汽笛を鳴らす。アンリは手を振り客車へと向かった。僕はアンリの母の元に駆け寄つた。

「父や母は元気ですか」「ええ。息災よ」

僕は伝言を頼み、列車に駆け込もうとした時、「ユウくんちよつと待つて」と止められる。手には丸められた手紙が握られていた。

「これお父さんからよ。アンリのことよろしくね」

僕は「はい」と返事をして、手紙を受け取って荷物を纏めた袋に入れ走った。アンリ達は箱席を取っており、僕はアンリの隣に座る。向かい合ってエレナが座り、窓側にはアンリとジョーが座っていた。

列車はゆつくりと動き始め、乗り場を離れていく。改札の向こうにいるアンリの母は段々と小さくなっていく。アンリは窓の外を見るが、駅側ではなく進行方向の前を見据えていた。まるで悲しみを隠すように。

「いよいよだな」「ええ」

ジョーの言葉にアンリが応えるといつもの調子に戻っていた。

「ユウさん、アンリさんのお母さんから受け取ったものは何だったのですか？」

「手紙だけど… 開けてみようか」

僕は袋から手紙を取り出し、紐をほどく。汽車に揺られながら文字を目で追っていく。

『ユウへ』

お前も遠くの国へ冒険することになると聞き、筆を起こすことにした。

私は19歳の頃に東の国へ冒険に出た。子どもの頃ユウ達に聞かせたことがあったが、話の

ように決して冒険は楽しいことばかりではない。冒険の間に諍いや仲間の死など艱難に呑

まれながら幾多の国を渡った。私は東の国へたどり着いた時、もう冒険はしまいと思った。

あまりにも失うものが多かったからだ。しかし、冒険を通して自分を知ること多い。

これからお前には様々な苦難が待ち受けているだろうが、お前に伝えておきたい。

仲間は大切にしないさい。修練を怠らないよう。そして、生きて帰って来なさい。

父より』

餞別にしてはやや重い手紙を読み終え、僕はふと車窓を覗く。列車は農村部を走り抜けていた。父はこの手紙で何を伝えたかったのか。冒険への希望と波乱が交錯しながら汽車は黒煙を噴き出して走ってゆく。

第11回

「それで続きは！」

ビアンカは身を乗り出して顔を近づけてくる。

「お嬢様、就寝のお時間でございます」

しかし、メイドが背後から声を掛けた。ビアンカは不満げに椅子に座り直す。時計に目をやると11時を回っていた。紅茶も湯気は消え、熱を完全に失っていた。僕は冷めた紅茶を一口飲む。紅茶とミルクが分離してしまって美味しくない。顔に出ているのかメイドがお替りを促すが、断った。

「もうこんな時間か。また明日にしよう」

「ええ。これからというのに！」

ビアンカは子どものように駄々をこねるが、僕はメイドに目をやり、「メルさんも寝る時間だと言っているし」とビアンカを宥める。僕もそろそろ眠くなってきた。瞼も重く、身体も左右へ揺れる。

「それもそうね…ユウ、明日また続きを話して頂戴。」

「もちろんだよ」

僕はビアンカに微笑み、メイドに案内されて寝室へと向かった。メイドは蠟燭立てを持ち、火の灯りを頼りに長い廊下を進んでいく。案内された部屋は客人用の寝室だと言うが、クイーンサイズのベッドがある20帖くらいの部屋で、一体ビアンカはどんな部屋で床に就くのか興味が湧いた。メイドは水入れとコップを机に置いて、「おやすみなさいませ」と言うのと扉を閉め出ていく。薄暗い部屋でやることもなく、僕は蠟燭の火を一息で消して眠りについた。

次の朝、朝日で目が覚める。小さな窓からレースカーテン越しに白く温かな光が差していた。一人には大きすぎるベッドを見回す。

そういえば、昨日は洋館に泊まっていたのだと覚醒しきれていない頭を働かせ、ゆっくりと起き上がる。しばらくするとドアからノックがした。

「おはようございます。ゆっくりお休みになれましたか」

メイドが片手に着替えを持ち、部屋に入ってきた。

「ええ」「それはよかったです。朝食の準備ができました。」

メイドは相変わらず無表情で必要なこと以外は何も話さなかった。メイドから洗濯を終えたシャツとズボンを受け取る。

「着替え終まりましたらお声がけください」といい、メイドはドアを閉めた。

僕は申し訳程度にベッドを直してから着替えを始めた。机の脇にはいつの間にか鎧が置かれていた。磨いてくれたのか土や生傷で汚れていた鎧はピカピカになっていた。

僕はハツとして、腰につけていた革袋を探した。昨日着替えの時に一緒に外して・・・その後メイドはどこに置いたのだろうか。机の上にもなく、20帖ほどある部屋をあちこち探したが、見当たらなかった。僕はドアを開けて、メイドに尋ねた。

「メルさん、昨日風呂場で預けた革袋はどこですか!」

「・・・それでしたら着替え終わってからの方がよいかと預かっておりました。申し訳ございません」

「あ、そうでしたか。よかった・・・部屋になくてどこにやったかなあつて思つて」

「それはそうとお客様・・・下を穿かれては。」

「・・・あ」

そういえば、着替えている途中だった。その後、着替えて朝食の場へと案内された。

ビアンカは朝食に手をつけず待っていてくれていたようだ。

「お目覚めは如何、ユウ」

「お待たせしてすまない。ゆっくり眠ることが出来たよ」

僕は椅子にもたれるように腰かけ朝食をとった。朝食はパンにサラダ、冷製スープと簡素なものだった。ビアンカはパンをちぎって口に運んでいると、「そうだ」と思い出したように話しだし、

「お昼は学習の時間なの。冒険の話を知りたいのだけれど、ごめんなさいね。夕食まで狭い館だけれどゆっくりしていい」

「いや、お構いなく。」

僕はほんの少しだけホツとした。ビアンカが昨晚あれだけ楽しみ

にしていたのでずっと冒険話をしないといけないのかと憂鬱になっていたが、心配には及ばなかったようだ。僕は一息ついてスープを啜った。とはいえ、一日中何もしないのも忍びない。

食後のお茶を飲み終わると、ピアノカがメイドに車椅子を押され部屋へと戻っていくのを見送ると僕も寝室へと戻った。

やることもなくクイーンベッドに大の字になって寝ていると、シーツを替えるにメイドがやってきた。僕は起き上がり、メイドに話しかける。

「何か手伝えることはありませんか？」

「はい？」

メイドは怪訝な表情を浮かべた。まあ客人がそんなことを言えばそうもなるか。

「ただで泊まらせてもらうのも申し訳ないので何か手伝いたいのですが」

「はあ。しかし、掃除も洗濯も私一人で事足りませんし」

「じゃあ、庭の剪定はどうですか？経験があるので軽くはできますよ」

「そんな！お客様にそんなこと……」

「僕のわがままですから。お願いします。」

僕はメイドに深々と頭を下げた。「頭をお上げください！」と言うと、

「分かりました。ですが、ご無理はなさらないでくださいね。ハサミを準備しておきます」

とエプロンの前掛けで手を拭き、外へと向かった。

改めて庭園を見ると、とても広い。昨日の夕暮れに見た時は気味の悪さが目立ったが、綺麗に手入れをしてあげれば我が国の公園よりも美しい庭園になるのではないだろうか。メイドは僕に剪定ばさみを渡すと、「後の掃除は致しますので」と洋館へと入っていった。

不規則に伸びる枝を切っていく。うちには庭なんてものはなかったが、果物を育てていたのでよく剪定を手伝わされていた。アンリの家にある林檎の木も剪定にいったことがある。

そういえば、アンリは歩みを進めているのだろうか。きっと彼女は

僕の知らない場所へと冒険に出ているのだろう。もう僕には関係のないことなのだが。

思えばずっとここにいる訳にもいかない。迎えは永遠に来ないのだ。僕は革袋から丁寧に折られた紙を広げる。角が茶色く汚れ、インクが少し滲んだ手紙——今なら父の伝えたかったことが分かる。冒険が始まって数か月だが、冒険の辛さというものを痛感させられた。僕は逃げ出したが、父も何度も逃げ出そうと思ったことがあるのだろう……それに、

『生きて帰ってきなさい』

この重い言葉に親の優しさのようなものを感じた。ミスリードなのかもしれないが。

勝手な解釈だと自覚しているが、この言葉が逃げてもいいのだと僕には読めた。生きて帰ることが全てだと……僕は手紙を暫く眺めてから再び革袋へとしまった。

剪定をある程度終わると、軽く昼食を摂り午後からは草むしりに励んだ。雑草が長くあちこちに伸びていてずっと気になっていたのだ。昼からはメイドが箒を持ち、下に落ちた枝を掃いている。日差しは強くなり、僕の頭上をじりじりと照らす。首元には汗をかき、僕は首を後ろに回して汗を拭きとる。ずっと屈んだ状態で腰も痛くなってきた。僕は立ち上がり、腰を回した。

「お疲れですか」とメイドが声を掛けてきた。

「ええ。でも楽しいものですね庭を弄るのも。そんな趣味はないもので」

「……ご当主は庭造りを嗜んでおりましたので」

「ご当主というのは」

「お嬢様——ビアンカ様のお父様でございます。」

僕は恐る恐る「ビアンカの父上は今どこに？」と聞くと、メイドは黙り込んで

「申し訳ございません。お答えできません」と静かに答え、「お客様が話したくないことがあるように」と付け加えた。メイドは僕がただの迷い込んだ冒険者ではないことを察しているのだろう。僕は下を向

いたまま何も話さなかった。

草むしりから小1時間、ビアンカがメイドに連れられ洋館のバルコニーへと現れた。バルコニーからビアンカは「ユウ、お茶にしましょう」と声を掛けられ、ズボンで手を無造作に拭き取り階段を駆け上がった。ガーデンテーブルには白いティーセットが用意されていた。

メイドは慣れた手つきでケーキスタンドの下段からサンドウィッチを取り分け、小皿を手前に置いていく。「いただきましょう」とビアンカがティーカップを持ち、口に運ぶ。僕もサンドウィッチを手に取り、はぐはぐと詰め込んだ。

「綺麗になったわね。ずっと手入れが出来ていなかったから… ありがとう。ユウ」

ビアンカは見違えた庭を一目見て小さく微笑んだ。

「いや、礼には及ばないよビアンカ。泊まらせてもらっているのだから何かしようと思ってね」

「そう？フフツそれならよかったわ。そうだ、昨日の続きを話してくださらない？」

「冒険の話かい？いいけれど、勉強の方は？」

「もう今日の分は済ませたわ。夕食まで暇なの。ね、いいでしょう？」

ビアンカはお菓子をせがむ子どものように目を輝かせて話を聞きたがった。僕も一宿一飯の身である上、断ることもできなかった。

「メルさん、夕食まではどのくらいですか？」

メイドは「4時間ほど」とだけ答えた。4時間もあれば帝国までのことは話すことが出来るだろう。僕はプライオン王国からの旅立ちから先の思い出を辿ることとした。

第12回

車窓の向こう側は真っ暗でまるで夜空を走っているような気分がした。風に揺れる黒煙は景色と同化しているほどだ。座席に座っているだけなのに臀部が痛い。鎧のせいで肩もこり、早くベッドに入らなかった。隣の座席に目を移すとジョーとエレナは寝息を立てていた。エレナはジョーの肩に頭を預けていた。隣に座るアンリは肘を ついて何も見えない車窓をじつと眺めていた。視線に気が付いたのかアンリは僕の方へ振り向く。

「起きていたの」

僕は「うん」と首肯した。アンリは再び車窓に視線を戻すと

「こんな暗くては先には進めないわね。今日は終着駅の近くに泊まらしましょう。」

「そうだね。僕も列車に乗っているだけだけど少し疲れたよ」

アンリは優しく「そう」と言うのと列車が止まるまで何も語らなかった。

少し先からは灯りが見え、灯りのもとへと近づいていく。列車はゆっくりと減速し、金切り音が車内に響く。僕たちは終着駅のネオブルに到着した。駅を出るとピンク色のケバケバしたガス灯の光が街を照らしていた。建物の扉は大きく解放されて煽惑するように女が裸に近い姿で肢体をくねくねさせている。二階の装飾がなされた大きな窓からも同様に痛いほどに誘惑してくる。そんな建物が大通りに数十軒も続いており、目のやり場に困った。アンリはゴミを見るような目で「汚らわしい」と吐き捨てた。

王国では買春は厳しく罰せられていた。だから娼館というものも違法操業を除けば存在せず、僕たちにとっては未知のものであった。特にアンリはこうしたものには拒否反応が強く嫌悪感を抱くのは仕方ないことだ。エレナは顔を赤くして視線を落として歩き、ジョーは好色そうな顔をして辺りを見回していた。アンリは見かねたのか柄でジョーの頭をこつんと叩いた。娼館街を抜けるとT字路に当たり、突き当たりには50mの長さはあるレンガ建ての三角屋根の大きな

教会が目の前に映った。小窓からはオレンジの温かな光がポツポツと漏れており、どうやら宿舎があるようだ。アンリは戸を叩いて人を呼ぶ。暫く待つとゆっくりと戸が開かれた。

「どちら様でしょうか…。」

床につくくらいあるスカート丈、黒いワンピース状の服に頭には黒いベール―絵に描いたような修道女が戸からこちらを覗く様にして立っていた。

「旅の者ですが、一夜だけ泊まらせてもらいたいのですけど」

アンリが事情を話すと修道女は合点がいったようで初めて笑顔を見せる。

「冒険者の方でしたか！どうぞ中へ。部屋は狭いですがゆっくりと歩いてくださいね」

僕たちは修道女に案内され、宿舎へと入っていった。男性と女性で別れているようでアンリとエレナは別の修道女に連れられ別の階へと向かう。僕とジョーは修道女が手に持つ蠟燭立ての火を頼りに薄暗い廊下を歩いて行く。外装は立派なものだが、中は簡素、悪く言えばボロく廊下は歩きたびにギシギシと木の軋む音がした。窓からはすきま風が入り、ガタガタと木枠にガラス板が当たる音となる。

「こちらを使ってください。」

部屋は漆喰の壁でそれ以外にはベッドしかなかった。今にも横になりたい僕にとっては十分であった。僕は修道女に軽く会釈をして扉を閉めようとした時、冷え冷えとしたこの部屋で右手に温かな感触がした。修道女が僕の手を握ってきたのだ。突然のことに僕は驚いた。

「私、セレーネと申します。お困りのことがあればいつでもお呼びくださいね」

「はあ」と僕は間の抜けた返事をする、それではとセレーネは帰っていった。困ったことと言ってももう寝てしまう訳で、明日の朝には旅立つのだが…なんとも変わったことをいう修道女だと思いながら寝床についた。疲れからかベッドに入るとすぐに寝付いてしまった。

「―ウ…ユウ…なさい…。」

甲高い声で目が覚める。ゆっくりと瞼を開けると薄暗い漆喰が塗られた天井とアンリを認めた。僕は部屋に備え付けられた食パンくらしいかない小さな窓を見つめる。朝日はまだ昇っておらず、妖艶な輝きを放っていた娼館街も水を打ったように静まり返っていた。何より鳥のさえずりも鐘も音というものが何一つなかった。

「今何時だい？」

「5時よ」とアンリは僕の首から下にかけていた毛布をひっぺがす。一気に僕の熱を奪い、僕は身を震わせた。

「先を急ぐにしても5時は早くないかい？」

「あら、礼もせず立ち去る気？ここはただの宿屋ではなく教会なのよ？奉仕をしなければならぬでしょ。早く顔を洗って礼拝堂へ向かいなさい。私はジョーを起こしに行くから」

アンリは勢いよく部屋を出ていった。僕は欠伸をひとつかき、のそのと廊下を歩いて外にある井戸へ向かった。戸を開けると冷たい空気が身体に染み込んでいく。少し歩くと井戸には先にエレナが水を汲んでおり、どうも持ちあがらないようで綱を必死に引っ張っていた。僕は見かねて井戸に駆け寄ってエレナの後ろから綱を引っ張る。すると綱は地面へと運ばれて水の入った桶があがってきた。

「あ、ユウさん。おはようございます…。それとありがとうございます」

「おはようエレナ。君も顔を洗いに来たのかい？」

「いいえ。アンリさんからバケツに水を汲んできて頼まれました」

エレナの足元を見るとバケツがあり、僕は桶の水をバケツに移し残りの水で顔を洗った。桶から溢れた水が地面を黒く染めていた。

「昨日はよく眠れたかい？」

「はい…。列車の中でも眠ってしまっ…きつと緊張していたんだと思います」

「今日からやっと冒険らしい冒険の始まりだ。頑張ろうエレナ」

「はい、ユウさん」

エレナは決心のついた顔で返事をする、遠くから「ユウ！」と怒号がした。この声はアンリだ。アンリの背後にはまだ眠そうにして

いるジョーが瞼を半分閉じた状態で立っていた。

「何油を売ってるの！礼拝堂に向かいなさいと言ったでしょ。さつさと行きなさい！」

アンリに怒鳴られ僕とエレナは礼拝堂へと走る。僕とエレナは走りながら顔を合わせて笑いあつた。

礼拝堂には大きな十字架が立っており、壁面には聖書に倣った宗教画が施されている。十字架の下には刺繍の入ったテーブルクロスが敷かれた教壇にその前を規則正しく整列されたベンチが並べられていて、見るに20数列はあるだろう。

僕は一つ一つ丁寧に雑巾で拭きまわっていった。木の繊維が雑巾に引っかかってザラザラと音が鳴る。後ろの列から拭き始めているが、ベンチや本立ては埃を被っており使われていないことが窺えた。「そんな調子じゃ日が暮れるわよ」

アンリの声が礼拝堂に響く。まるで修道院長かのように僕たちを使役する。本当の院長であるセレーネは別に頼んでもいないのだが、奉仕をして帰らねばならないとアンリが言つて聞かずこうして僕たちは礼拝堂の掃除に勤しんでいる。ジョーは箒を掃き、エレナはたきを持って埃を払っている。アンリは指示と水汲みをしている。

僕はやつと5列まで拭き終えるが、まだまだ拭き終えていないベンチが前に立ちはだかつていた。ため息をつかなければやりきれない。腰を拳で叩いて再び中腰でベンチと本立てを拭き始めた。そんな作業は30分ほど続きやつと終えると、アンリは

「終わった？じゃあ、ジョーと一緒に地面を掃きなさい。ジョー、手が止まっているわよ！」

と新たな苦役を与えてきた。僕は「うん」とうなだれながらアンリから箒を受け取り、残りの力を振り絞つて地面を掃く。これでは冒険に出かける前に体力を消耗してしまうような気がした。しかし、手を抜くところからともなくアンリの活が入る。早く朝が来ないかと待たばかりだった。

6時前にセレーネが礼拝堂へと入ってきた。掃除をしている僕たちを見て驚いていた。他に奉仕を買つて出るパーティーなどいな

かったのだろう。

「まあまあ旅のお方にこのようなことを…別によろしいですのに」「いいえ。昨日一日泊まらせて頂いたお礼です。何もせずに出ていくのでは神に失礼ですので。今日の朝には出発するので大したことはできないですけれど…」

セレーネはアンリの話聞いて「はい?」と顔をゆがめた。

「もしかして、橋のことをご存知ないのですか?」

「橋のこと?」

「はい。実は先月の大洪水で隣町に抜ける石橋が決壊いたしました。まだしばらくは渡れないのです…」

「そうなのですか」とアンリは手を顎に添えて考えていた。予期せぬ事態にさすがのアンリも動揺しているようだった。ジョーやエレナも手を止めて深刻そうな顔をしている。先へと進みたい焦燥とは裏腹に道を分断させた天災―早くも冒険の艱難に出くわしてしまったようだ。

「ええ。ですから橋が修復するまで泊って行ってください。私どもは歓迎いたします」

その時、朝を告げる鐘が真上で鳴り響き、陽がステンドグラスに当たり極彩色の影が真ん中を通る赤い絨毯へと差してきた。そんな偶然が重なってかセレーネが急に天使に見えた。

「旅の方には申し訳ありません。わたくしもお手伝いしますわ」

セレーネは僕の手にかけていた箒を取って掃除を始めた。その瞬間アンリの顔が少し険しくなった。

この日を境に数日間に渡る奇妙な修道院での修行のような生活が始まるのだった。